

4. 出合遺跡

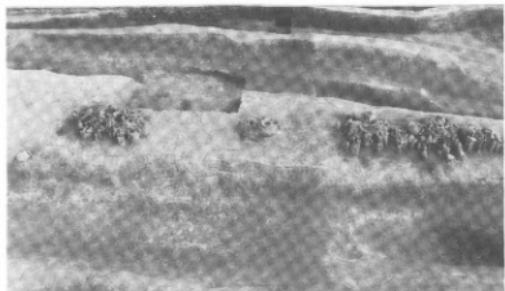


fig. 103 上器群(西から)



fig. 104 南土器群(北から)



fig. 105 中央上器群(西から)

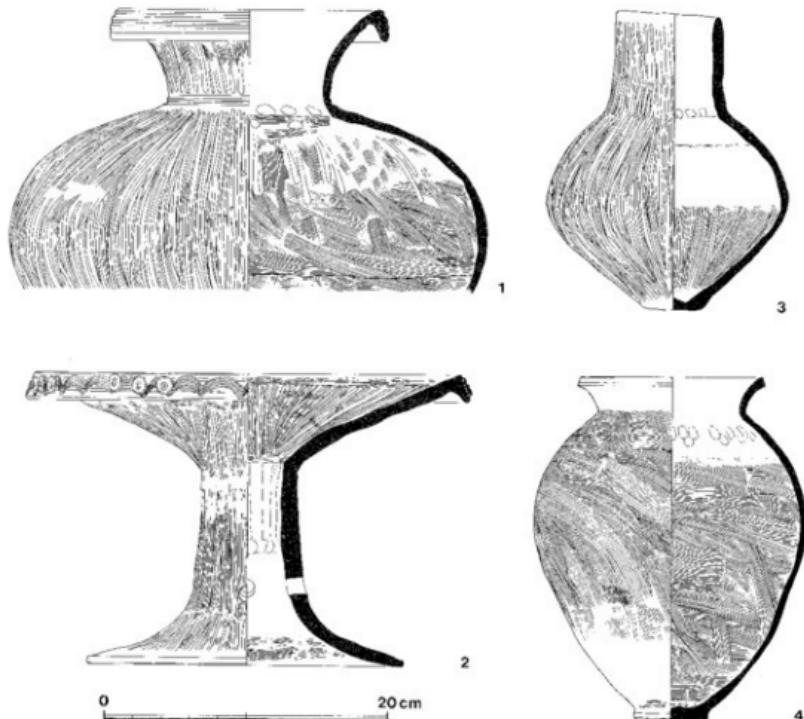


fig. 106 土器群出土実測図 1・2：中央七器群 3：南土器群 4：北土器群

### 3.まとめ

弥生時代後期の溝については、調査地が限られていることもあり性格は不明であるが、流路として機能していたと考えられる。土器群については、その破損状況から廃棄されたものと思われるが、出土位置や状況から供献的な性格もうかがえ断定は難しい。この一括出土の土器は、明石川流域の弥生時代後期の土器様相を考えるうえで良好な資料である。

第2遺構面検出の掘立柱建物をはじめとする遺構から、この付近に平安末～鎌倉時代の集落址の存在が確認できた。また、掘立柱建物も総柱建物以外にS B 02のように特異な形をもつものもあり、集落址の構造を考えるうえで貴重な資料がもたらされた。

明石国包線に伴う出合遺跡の調査は、今後継続される予定で、今回調査地の下層の調査及び南側の延長部分と調査されることにより、時代的変遷や面的な拡がり、遺跡の在り方など明らかにされるであろう。

## 5. 上池遺跡

### 1. はじめに

玉津町上池は、明石川と伊川の合流する北側の沖積地に位置しており、周辺には新方遺跡や吉田南遺跡等、神戸市内でも有数の遺跡の集中する地域にある。昭和60年度に試掘調査を実施したところ、平安時代の遺物包含層および柱穴を確認し、事業予定地内に埋蔵文化財の存在することが明らかになった。

今年度は、事業に伴い遺跡の破壊される可能性のある地区の一部に対して調査を実施した。

### 2. 調査の概要

調査区が2ヶ所に分かれるため、北側を第1調査区、南側を第2調査区と仮称する。

#### (1) 第1調査区 (約140 m<sup>2</sup>)

**基本層序**

第1層・現代の擾乱及び盛土、第2層・旧耕土、第3層・床土、第4層・黒灰色粘質土(遺物包含層上層)、第5層・茶黒色粘質土(遺物包含層下層)、第6層・暗黄褐色粘土、地山(淡青緑色粘土)となっており、第4層を中心にして多量の遺物が出土している。

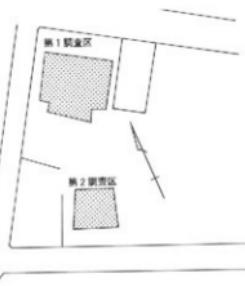


fig. 107 調査区位置図 1:1,000



**検出遺構** 第4層除去後、第5層上面で第Ⅰ遺構面が確認され、地山上面で第Ⅱ遺構面が確認された。

**第Ⅰ遺構面** 第Ⅰ遺構面で確認されたものには、掘立柱建物（SB01）1棟や土器溜まり（SX02）の他多数の柱穴・ピットや土坑等がある。

**掘立柱建物（SB01）** 掘立柱建物は、東西2間（柱間2m）・南北4間（柱間2m）と南北に長い建物である。確認された11箇所の柱穴の内2箇所で柱材が遺存しており、径約20cmの材が使用されていた。柱穴内からは、遺物包含層から出土する上器とほぼ同時期の遺物が出土しており、平安時代前半ごろの建物ではないかと考えられる。

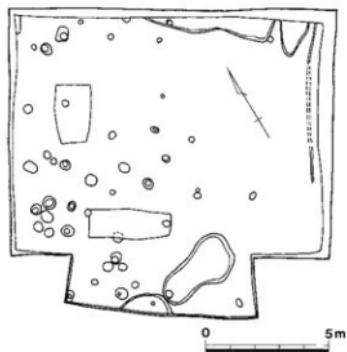


fig. 109 第Ⅰ遺構面平面図

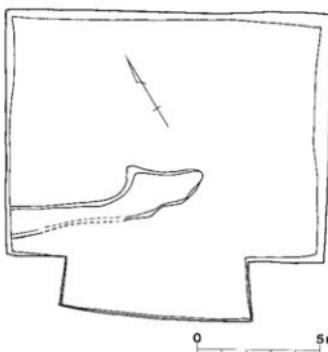


fig. 110 第Ⅱ遺構面平面図

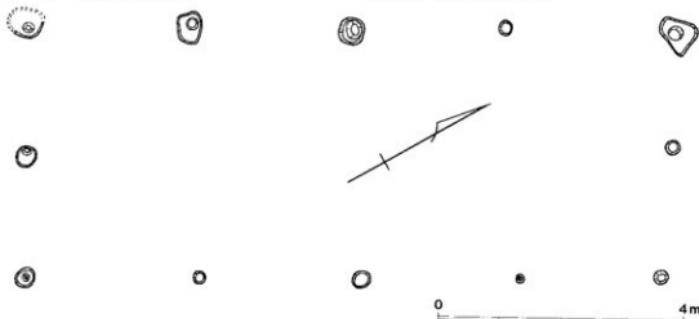


fig. 111 SB01 平面図

## 5. 上池遺跡

土器溜まり  
(SX02)

土器溜まりは、長さ3m、幅1.5m、深さ0.3m内外の不定形の落ち込みである。西端で掘立柱建物の柱穴と切りあっており、掘立柱建物との関係は、掘立柱建物と同時期もしくは新しいものと考えられる。出土遺物は非常に豊富であり、土師器壺・皿・甕・須恵器壺・壺蓋・皿・甕・壺・鉢、縁軸陶器、灰釉陶器、瓦片等がある。完形品も多数含まれており、廐棄理由不明であるが、掘立柱建物となんらかの関係があるものと考えられる。出土個体数は数百個体になるものと思われ、平安時代前半の土器群として良好な一括資料となるものである。

他の柱穴・ピット・土坑等も平安時代前半のものと思われるが、その性格等は明確にすることはできなかった。



fig. 112 SX 02平面・断面図

第Ⅱ遺構面

第Ⅱ遺構面では、溝1条を確認したのみである。

溝は、深さ約0.1mで長さ約7mを確認した。出土遺物は多くないが、奈良時代に遡る可能性のある遺物が含まれており注目される。



fig. 113 SB 01

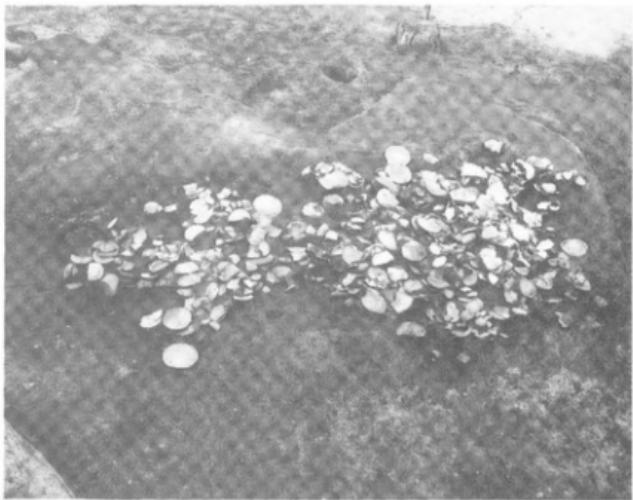


fig. 114 SX 02

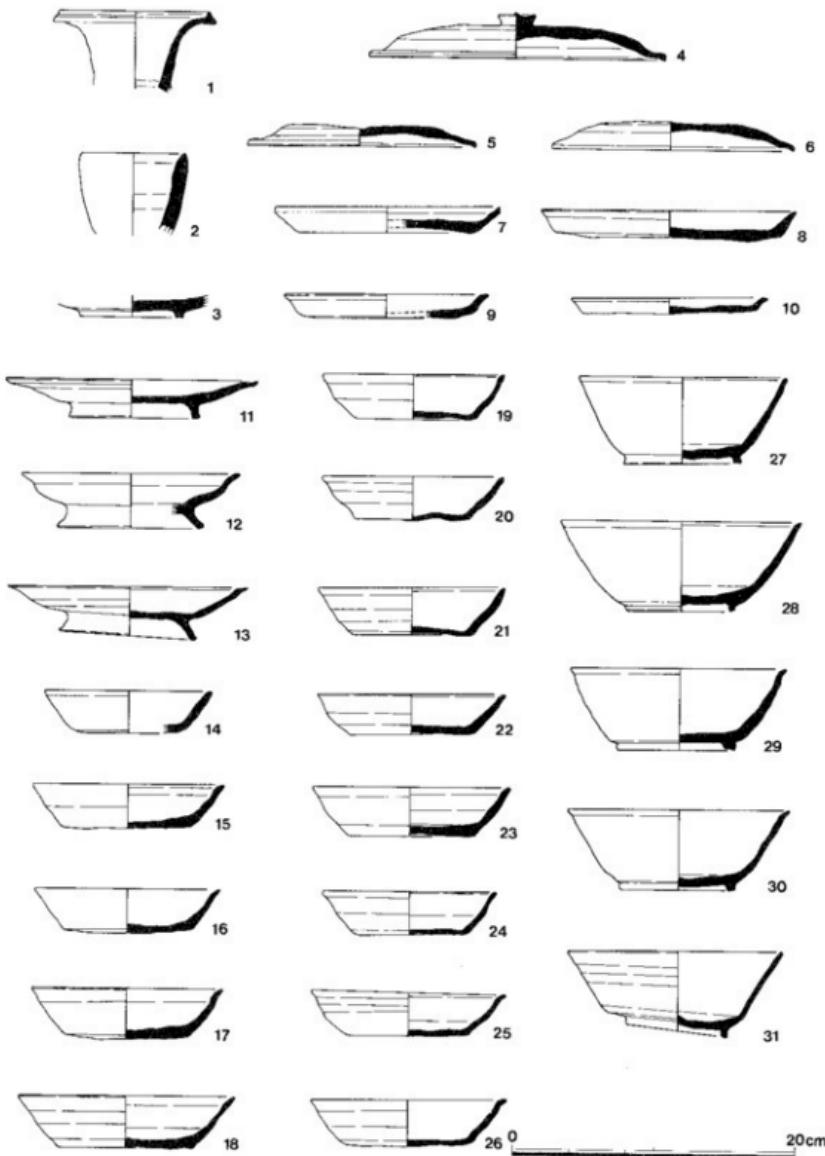


fig. 115 包含層・S X 02出土土器実測図

1 ~ 3 · 9 · 12 · 27 · 31 : 包含層 他は S X 02  
2 · 9 · 10 · 12 · 13 · 25 : 土師器 他は須恵器

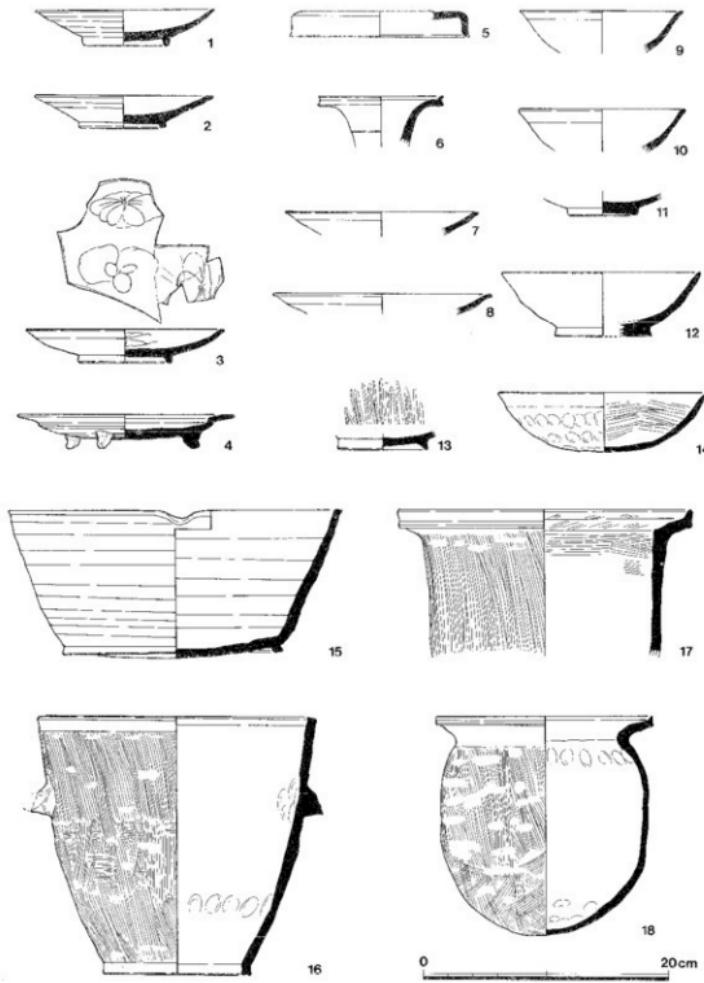


Fig. 116 SX 02出土土器実測図  
1~8:灰釉陶器 9~12:綠釉陶器  
13~14:黒色土器 15:須恵器 16~18:上野器

(2) 第2調査区 (43m<sup>2</sup>)

**基本層序** 第4層までは同様であるが、第1調査区の第5・6層に相当する層は認められず、第4層下に地山が確認された。遺物は第1調査区同様、第4層を中心に出土している。

**検出遺構** 遺構は、第4層除去後地山面で溝1条とピットが確認されたのみである。溝は幅約1mの浅いもので、ほぼ東西に伸びており、調査区外に一部伸びている。出土遺物が少なく、その時期については明確にすることはできなかった。

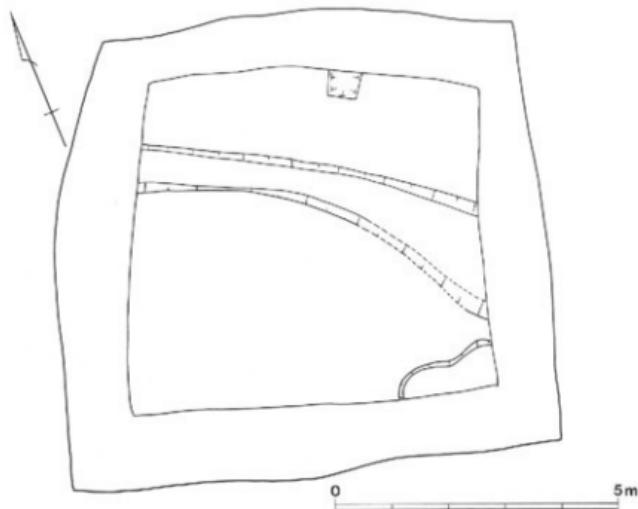


fig. 117  
第2調査区平面図



fig. 118  
第2調査区全景

### 3.まとめ

今回の調査では、調査面積がわずかであったにもかかわらず多大な成果を得ることができた。

平安時代前半（10世紀前半ごろ）と考えられる掘立柱建物1棟をはじめ土器溜まり等の重要遺構はもちろんのこと、特筆すべき点はその出土遺物の豊かさにある。土器溜まりや遺物包含層からは、古代の硯である円面硯（踏脚硯）や墨書き器、綠釉陶器や灰釉陶器、多量の瓦片等が出土しており、一般の集落遺跡とは様相を異にした遺物群であり、古代官衙や寺院跡との関連が問われるところである。

また、第Ⅱ遺構面で確認した溝は、奈良時代に遡る可能性もあり注目される。

遺構は、第1調査区西側に集中して確認され、東へいくにつれて希薄になることが判明した。このことから、上池遺跡は当調査地から西へ向かって拡がっていくものと考えられる。



fig. 119 SX 02出土  
須恵器・土器

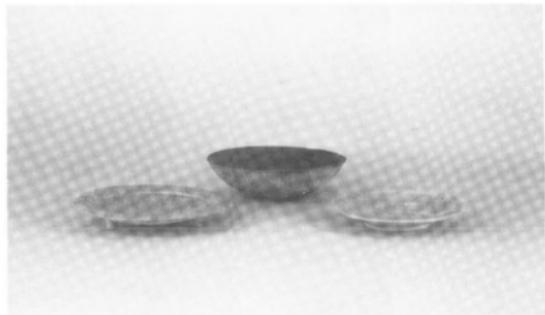


fig. 120 SX 02出土  
灰釉陶器・黑色土器

## かしへ 6. 押部遺跡

### 1. はじめに

当地における圃場整備事業は、昭和59年度より実施され、それに伴い埋蔵文化財発掘調査が行われている。

昭和59年度には鎌倉時代の遺物包含層および土坑が、昭和60年度には弥生時代後期から古墳時代にかけてのピット、住居址や平安時代後期～鎌倉時代の柱穴等が検出された。

今回は、田園池南辺地区での遺跡の有無確認と、前年度試掘により遺跡の存在が確認された地域の西半部に設けられる排水路部分及び切土部分について発掘調査を実施した。

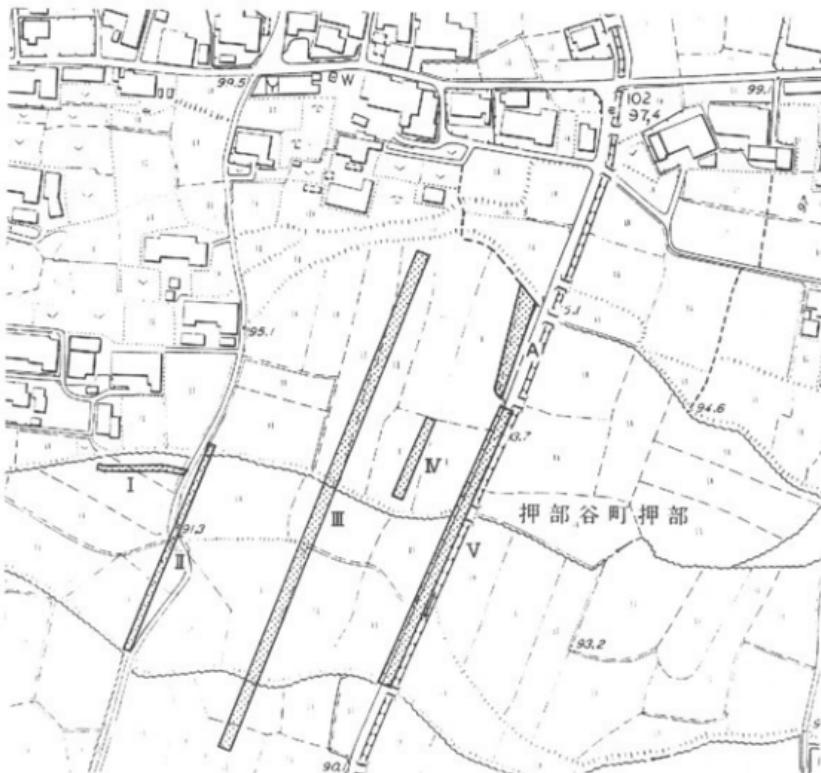


fig. 121 調査地位図 1:2,500

**2. 調査の概要** 出圃池南辺部の調査は、2m四方のテストピットを計11ヶ所設定し実施した。調査の結果、いずれも耕土直下は褐色砂礫層となっており、遺物は2~3片出土したが、造構は全く認められなかった。この地域は、遺跡の範囲外になっているものと考えられる。

**A地区**  
(200m) この部分については耕土直下地山となっており、遺物包含層、造構とも見られなかったが、遺物は地山直上より若干出土している。時期は鎌倉時代~室町時代のものである。

**I トレンチ**  
(105m) トレンチ南辺で、長さ21m以上、幅2m以上の自然流路を検出した。流路の堆積土中から4~5世紀代と思われる複合口縁壺と、5世紀末~6世紀初めの須恵器环身が出土した。

**II トレンチ**  
(105m) 明確な造構は、ここでは検出されなかったが現表土下0.4m~0.6mで暗灰色粘質土の遺物包含層が存在する。

**III トレンチ**  
(690m) 当所の基本層序は、耕土下約0.4mで黄灰色粘質土ないし暗灰質粘質土の遺物包含層が存在し、その直下は黒褐色粘質土となっている。造構はこの黒褐色粘質土をベースとしている。

造構はトレンチの中央付近に集中し、その南北では検出されなかった。柱穴、土坑、溝等があり、柱穴には小規模な掘立柱建物になる可能性をもつものもあるが、多くは調査幅の狭さからまとまったものとはならない。

柱穴群のやや南に東西に走る溝は幅約2m、深さ約0.8mを測る断面が幅広いV字状を呈するもので、弥生時代後期の土器が少量出土した。このトレンチで確認した造構で、時期を決定できるのはこの溝のみである。

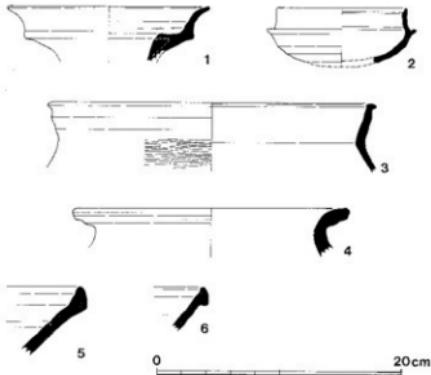


fig. 122 A地区 I トレンチ出土遺物  
1・2 I トレンチ 3~5 A地区

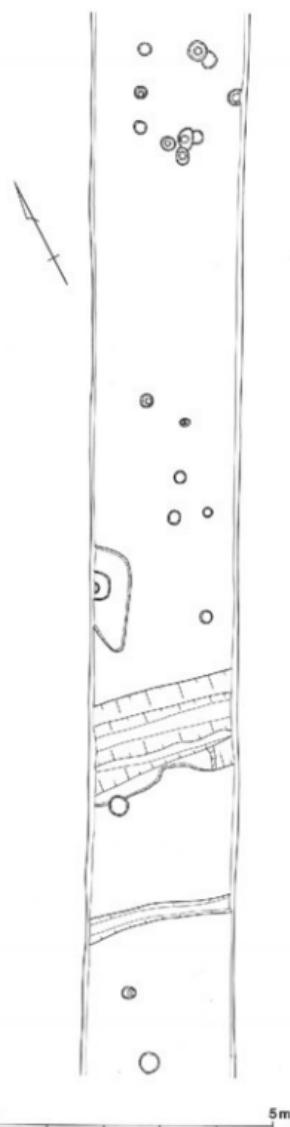


fig. 123 III トレンチ平面図



fig. 124 I トレンチ

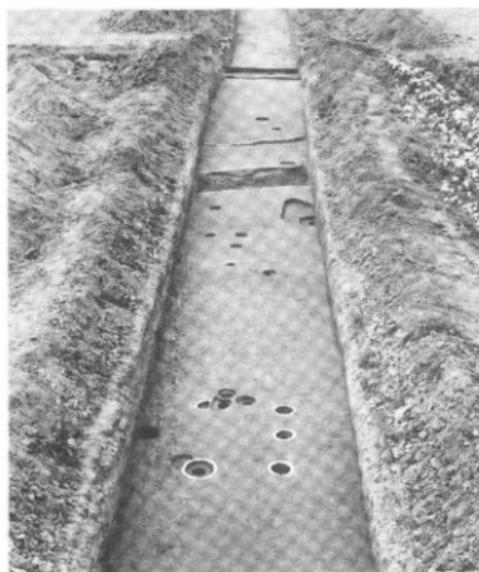


fig. 125 III トレンチ南半部

Mトレンチ  
(33m)

IIIトレンチで検出した弥生時代溝の性格を知るため設定したもので、IIIトレンチ検出のそれと同様の堆積状態を示す溝を検出し、これよりこの溝は少くとも30m以上の長さを持つことが確認できた。

また、このトレンチからは1m×0.6mの不整形形を呈する土坑で、下層に炭・灰、上層に焼土が堆積した性格不明の遺構が2基検出された。同様の土坑はVトレンチでも検出された。

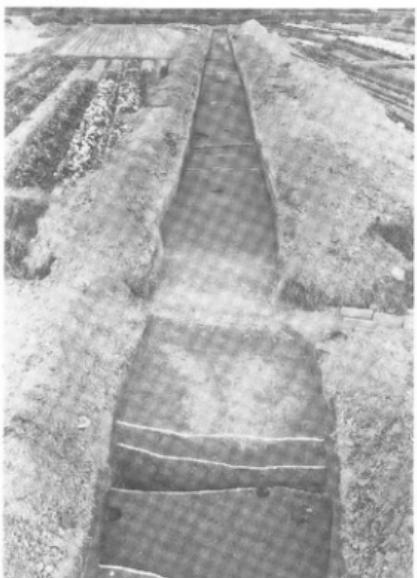


fig. 126 IIIトレンチ（南から）



fig. 127 IIIトレンチ弥生時代溝（北から）



fig. 128 弥生時代溝断面

- Vトレンチ (260m)  
遺物 遺構は北半部に集中し、南半は遺物包含層は存在するが遺構は確認されなかった。柱穴、土坑、溝等があるが時期を決定することはできなかった。
- 各トレンチから出土した遺物の年代は弥生時代、奈良～室町時代のものだが、注目すべきものにIVトレンチから出土した陶碗がある。これは脚部に長楕円形の透しとヘラ描きの沈線を交互に配した文様を持つもので奈良時代のものと考えられる。

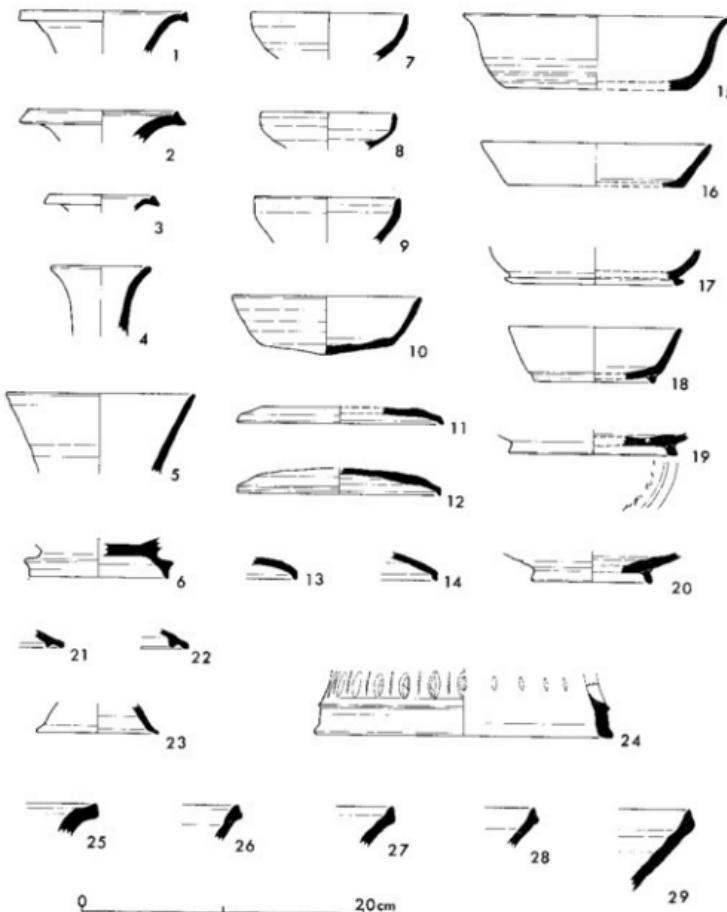


fig. 129 III・IVトレンチ出土土器実測図

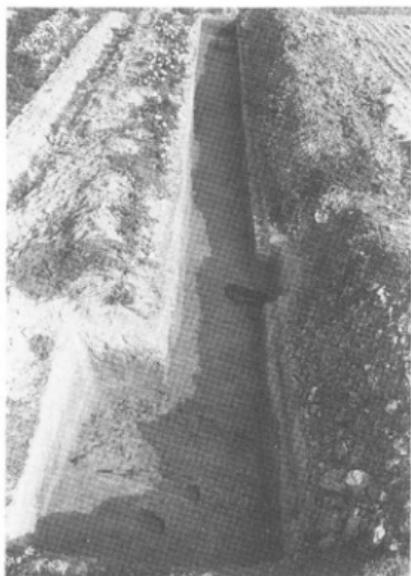


fig. 130 (左上) IVトレンチ（南から）



fig. 131 (右上) Vトレンチ（南から）

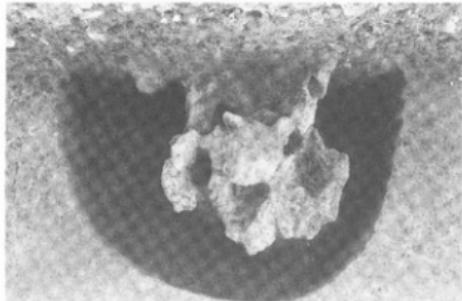


fig. 132 (右下) Vトレンチ焼土坑

### 3.まとめ

今回の調査の一つの成果は弥生時代後期の溝状遺構を検出したことでその規模から見て、集落を取りまくものと考えられる。そう考えれば溝の北側にあった柱穴群は同時期である可能性も出てくる。

もう一つは包含層からの出土ではあるが、奈良時代の陶碗が出土したことと、当時期のものとしては周辺では推定明石郡衙とされる吉田南遺跡で出土しているのみで、この地にも官衙的建物ないしは寺院に関するものが存在していたものと思われる。

## 7. 如意寺塔頭址・栃木遺跡

### 1. はじめに

明石川の支流、櫛谷川は北東から南西に向かって流れる全長約13kmの河川である。その中流にある谷口の集落から、谷口川によって形成された幅40m~100mの谷を東へ約1km入ると天台宗の寺院、比金山如意寺が存在する。この如意寺は現在、三重塔など鎌倉時代から室町時代にかけて造られた国指定重要文化財の建造物が3棟存在する古刹である。

寺伝によれば法道上人が大化元年（645年）に草創したと伝わり、一時は24坊の塔頭があったとされている。寺に残る元禄5年（1692年）に画かれた絵図にも塔頭の建物が数棟画かれており、また当時すでに耕地になっている水田にも、かつてそこに存在したと考えられる坊院の名が付けられている。

この如意寺付近の水田を含む栃木、谷口地区で、圃場整備事業が計画された。

当地区では、昭和57年度に行った如意寺の防火槽設置に伴う発掘調査で

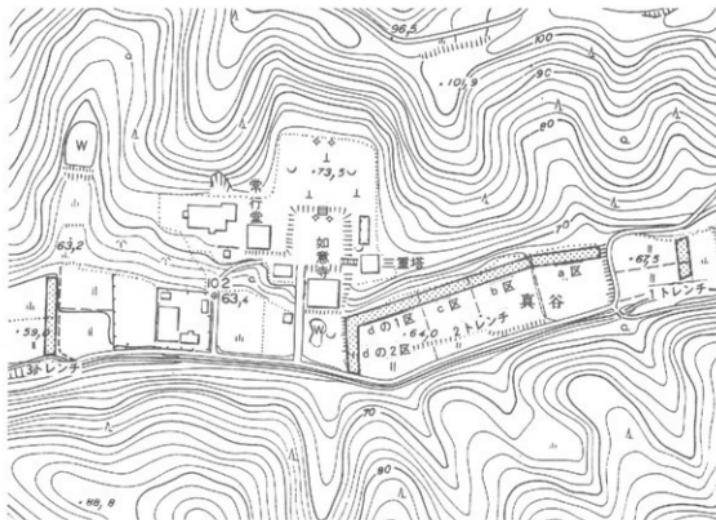


fig. 133 如意寺塔頭址 調査地位置図 1:2,500

中世の建物の基壇や近世の瓦窯が発見されており、昭和60年度に行った谷口川改修工事に伴う発掘調査では、中世の遺物を多量に含む落ち込みと、弥生時代から中世にかけての旧河道が発見されている。以上のように当地区内では埋蔵文化財の存在する可能性が非常に高いため、昭和60年度に試掘調査を実施した。その結果、谷口集落付近の低位段丘上では弥生時代中期後半（畿内第Ⅱ様式）の土器の入った土坑や、前記の旧河道の続きが見つかっている。如意寺付近においては中世から近世にかけての如意寺の塔頭跡と考えられる遺構が見つかっている。

そこで、工事影響レベルが、遺構面及び遺物包含層に達する排水路予定期部分について3.5m～5m幅のトレントを設定して調査を行った。

試掘調査の結果より、当地区では2つの遺跡に分かれる。1つは如意寺付近の櫛谷町谷口字真谷、真谷中に存在する如意寺塔頭址で、もう1つは谷口と柄木の集落付近の低位段丘上に存在する弥生時代から中世にかけての柄木遺跡である。トレント番号では前者が第1、第2、第3トレント、後者が第4トレントである。また第2トレントは4枚の水田にまたがっているが、この水田の境が前記の絵図や、試掘調査によって、かつての塔頭の区画になると思われるため、東からa区、b区、c区、d区と区分した。

（なお、小項目のトレント名の下の塔頭名は前記の元禄5年の絵図から比定した。）

## 2. 調査の概要 第1トレントの調査区内において、一段低い南半は、洪水による削平を

1. 如意寺塔頭址受けており、青灰色のシルトや粘土が堆積するのみで、遺物、遺構は、確

第1トレント 認されなかった。北半の部分についても、大部分が耕地の造成によって削

（実相坊） 平されており、耕土直下で地山が現れ、一部で、溝1条とその南側にピットが数個検出されたのみである。遺物も、ピット内より土師器片が数点出土したのみで、時期は確定できないが、試掘調査時に同じ水田から出土した遺物から14世紀以降の遺構と考えられる。

第2トレント 第2トレントa区東半では、直径20～30cmのピットが数個と弥生時代中期a区（福聚院）の落ち込み3基、自然流路1条が検出された。ピットからは遺物は出土

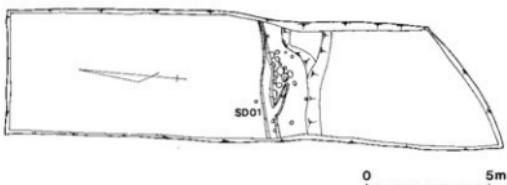


fig. 134

第1トレント平面図

せず、時期は確定できないが、埋土から中世以降のものと考えられる。

弥生時代の落ち込みはどれも形状は不定形で深さ5~15cmの浅いものである。埋土中より畿内第IV様式の弥生土器が10数点出土している。しかし、どの土器も磨滅が激しいことや、また埋土の状態から、これらの落ち込みは、自然の凹地で、そこに、すぐ北側の山中にある如意寺裏山遺跡から土器が流れ込んだものと考えられる。自然流路は、幅60~250cm、深さ30cmである。埋土の上層より、弥生土器片が出土しており、これも如意寺裏山遺跡より流れ込んだものと考えられる。

トレンチの西半では溝状遺構5条（S D03~S D08）とピットが7個検出されている。S D03は幅30cm~90cm、深さ5~30cmである。ただし、上半は削平を受けていると考えられる。遺物は出土しなかった。S D04は幅30cm、深さ10cmで長さ約3.2mである。土師器小皿が一点出土している。この遺構も削平を受けていると考えられ、本来はS D05と続く溝の可能性もある。S D05からS D08は多く切り合っている。これは塔頭の一区画内の西端にあたり、敷地内の西辺に溝が何度も掘り替えられたためと思われる。そのうちS D05は、幅50~70cm、深さ40cmを測り、埋土内に多くの炭が堆積しており、また、その中から平瓦が数点出土している。第2トレンチa区西半の遺構は埋土内の土器片より、14世紀代のものと思われる。



fig. 135  
第2トレンチa区出土  
土器実測図  
1・2：弥生土器 3：土師器

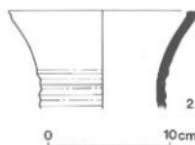


fig. 136 第2トレンチa区全景

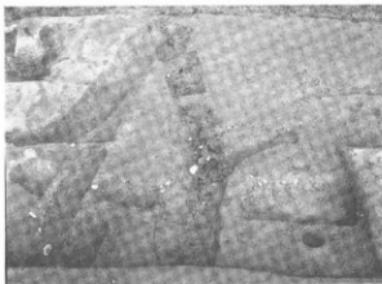


fig. 137 第2トレンチa区 SD04~08

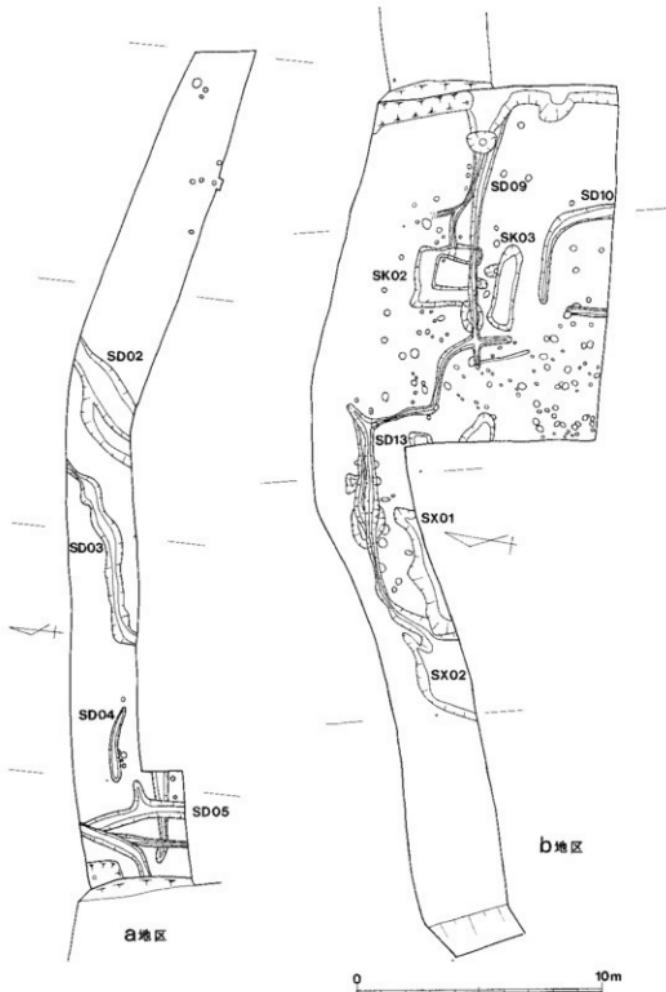


fig. 138 第2トレンチ a・b 区

- b 区(東揮坊)** 第2トレンチb区からは、溝状遺構7条(S D 09～S D 16)、土坑8基(S K 01～S K 09)、落ち込み2基(S X 01、02)と多数のピットが検出された。遺構の密度は西半よりも東半、北半よりも南半の方が高い。また、東側3/4は地山面が遺構検出面であるが、西侧1/4は盛土を行ってその上に遺構を築いている。
- 溝状遺構** S D 04、09を除く溝状遺構はそれぞれ、山際線の方向に並行または直交しており、ほぼ直線的で、所々で直角に曲がっている。また、深さは5～15cmと浅く、幅も30～40cmとほぼ一定している。これらのことから、建物等に付随する溝と考えられる。遺物は須恵器や土師器の小片がほとんどであるが、S D 13から青磁碗の底部の破片が出上している。
- SK02・03** S K 02とS K 03は幅70～100cm、深さ約40cm、断面が逆台形の土坑である。S K 02は250cm×270cm×240cmのコ字形をしており、土坑の底の部分において、一辺のそれぞれの境に段がついている。土坑内からは土師器の小皿が1点出土したのみである。埋土は淡灰褐色粘質土の一層のみで、一度に入為的に埋められたようである。S K 03は、長さ3.5mの長方形で埋土はS K 02と同様である。遺物は須恵器片と土師器片の他に瓦片が数片出土している。また、東の短辺附近に、こぶし大の石が埋土の中位に数個まとまって埋まっていた。このふたつの土坑は、出土遺物より14世紀代に掘られて、すぐに埋められたものと考えられる。しかし、これらの土坑がどのようなものかは不明である。
- ピット** ピットはS D 10、13の南側、S D 11の西側に集中して検出された。直径約5cmから30cmと大きさは様々である。柱痕のあるピットもあったが、建物としてまとまるものは調査区内ではなかった。しかし、調査区の南西方向に掘立柱建物があるものと思われる。



fig. 139  
第2トレンチb区全景

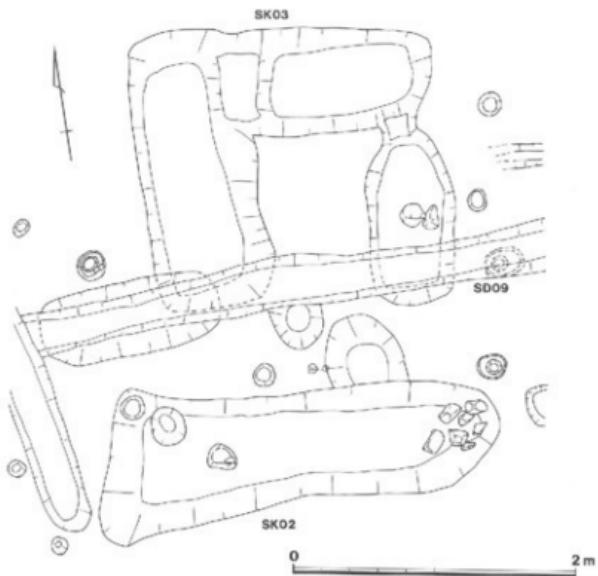


fig. 140  
SK02・03平面図

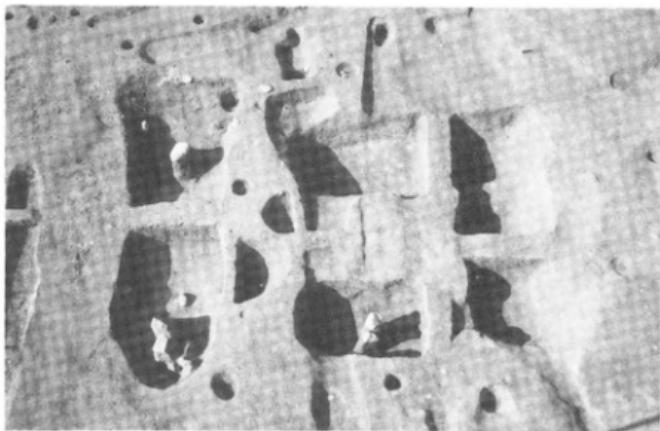


fig. 141  
SK02・03

SK01・02

トレンチの西半部にある2基の落ち込み(S X 01、02)はどちらも不定形をしており、深さ20~40cmを計る。トレンチ外にも遺構がでているため全体の形状はわからないが、SD 13が流れ込んでいるため、池状又は水溜まり状のものと考えられる。遺物は須恵器や土師器の小片の他に、須恵器のこね鉢が出土している。

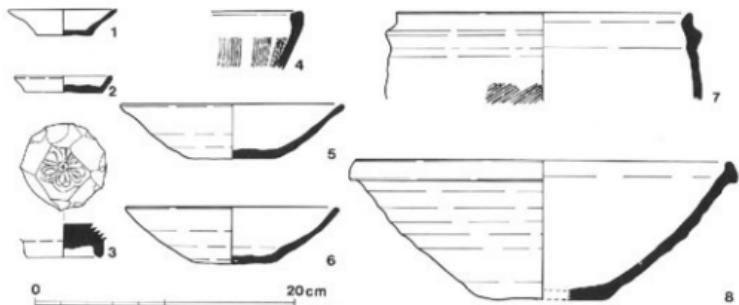


fig. 142 第2トレンチb区出土土器実測図

1: SK02 3: SD13 8: SX02 2・4~7: 包含層 1・2・7: 土師器 3: 青磁 4~6・8: 須恵器

## 出土遺物

第2トレンチb区から出土した遺物は、ほとんどが包含層の出土遺物である。そのほとんどが、須恵器の塊・鉢や土師器の皿・鍋などの小片である。その他の遺物としては、青磁片が2点、白磁片が2点、砥石、硯が各1点、すべて包含層から出土している。これらの遺物から第2トレンチb区の遺構は14世紀ごろのものと考えられる。

## c区(妙音坊)

第2トレンチc区の中央では自然流路の跡が検出された。しかし、旧流路の右岸側のみがトレンチ内にかかっているため幅・深さ等は不明である。流路内に堆積している砂の上層から弥生土器片が出土しており、弥生時代の中期ごろまで流れていた旧谷口川と思われる。西半では中世の石敷遺構が検出された。幅1.2m、長さ7.0mの範囲で直径1cm~5cm程の小礫を数いていた。礫の間から出土した須恵器片より13世紀から14世紀のものと考えられる。

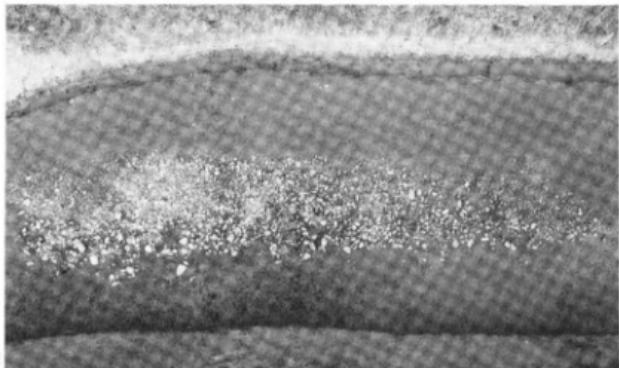


fig. 143

第2トレンチc区石敷遺構

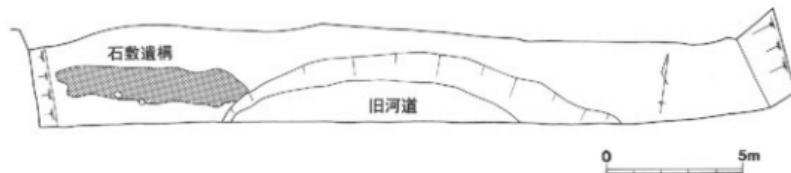


fig. 144 第2トレンチc 区平面図

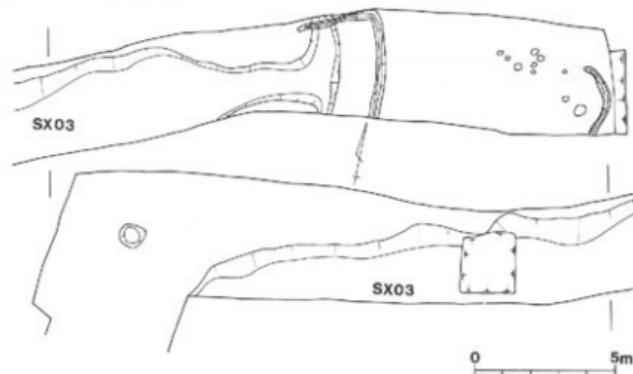


fig. 145 第2トレンチd 区平面図

d区(宝惟坊) d—1区では東端でピットが数個確認された。ピットの埋土から須恵器壇の小片が出土している。中央部より西にかけては、灰色粘土や灰色粘質砂が堆積した落ち込み(SX03)が検出された。埋土中より多量の近世陶磁器類や瓦・木製品・漆塗製品が出土した。埋土の状態から、かつては溝水していたものと考えられる。



fig. 146 第2トレンチd 区全景

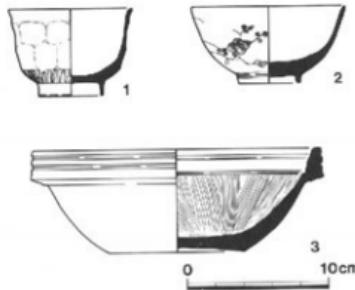


fig. 147 d区SX03出土器実測図

d-2区のトレンチの土層から、水田の南側半分は洪水による削平を受けており、その後土盛をしていることがわかる。盛土及び洪水堆積土中より近世の陶磁器類の他、中世の須恵器片、瓦、滑石製石鍋片も出土している。近世の瓦は盛土・洪水堆積土のどちらにも多量に含まれている。

### 第3トレンチ

(一乗院)

**SX04・05** 第3トレンチでは近世と中世の2層の遺構面が確認された。上層では近世の「おけ」を埋め込んだ遺構(S X 04)とそれに続く落ち込み(S X 05)が検出された。

S X 04に埋め込んでいる「おけ」は、たて板21枚に底板4枚を組み合わせ、上半に1本、下半に3本の竹製のタガでしめている。直径は95cmで残高は60cmである。一辺1.3mの方形の掘形を掘り、その中に埋め込んである。掘形の一部は後述する中世の井戸枠を利用している。「おけ」の中には細い木材、竹、もみがら等がつまっていた。掘形の北辺はS X 05に続き、S X 05は溝状になってトレンチ外に伸びている。以上の形状により、S X 04は建物に付随する生活排水の浄化槽と考えられる。遺物はS X 04、S X 05から陶磁器類・瓦等が出土している。

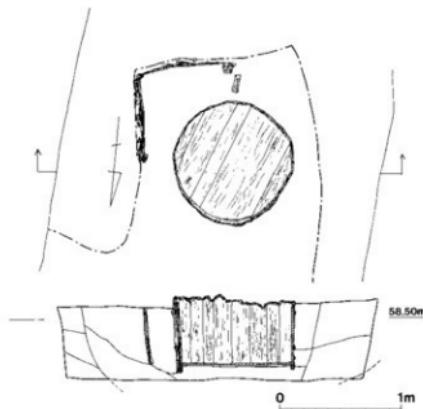
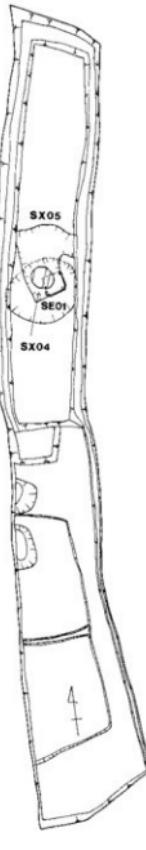


fig. 148 (左) 第2トレンチ遺構平面図

fig. 149 SX04 平面・断面図



SE01

下層では中世の井戸 1基が検出された。形状は木枠をもった方形のもので、たて板に上下 2段の桟木を組み合わせたものである。四辺の井戸枠のうち東と南の二辺は完存するが、北辺は完全にはずされており、西辺もたて板 1枚と下段の桟木が 1本残るのみである。これは前記の近世の S X 04 の掘形を掘る際に取り除かれたためである。

井戸の大きさは一辺 0.8m 残存する深さ 1.4m で、底には直径 20~40cm 程度の石を、たて板の下にすえている。曲物等の下部施設はなかった。井戸の掘形は上面で直径 2.6m、底面で 1.6m のすり鉢状をしている。



fig. 150  
SX04 断面



fig. 151  
SE01 断面

掘形の埋土内より、須恵器の碗や鉢と瓦質の甕が出土している。井戸内の埋土の中層からは長さ16cmの木製舟形が出土している。これは井戸を埋める際に入れたものと考えられるが、時期は不明である。

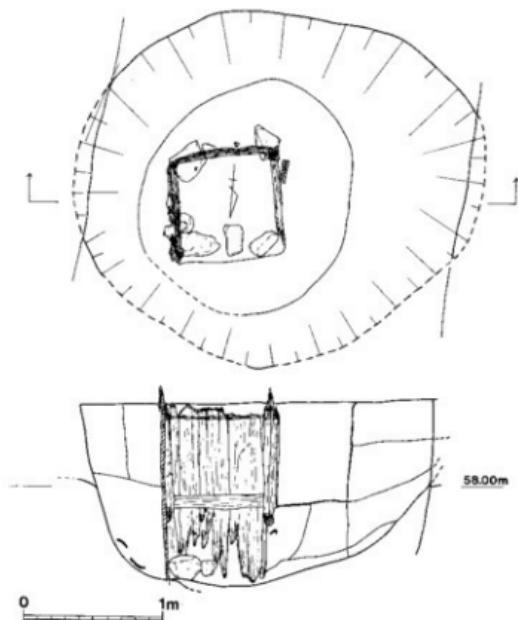


fig. 152  
SE01平面・断面図

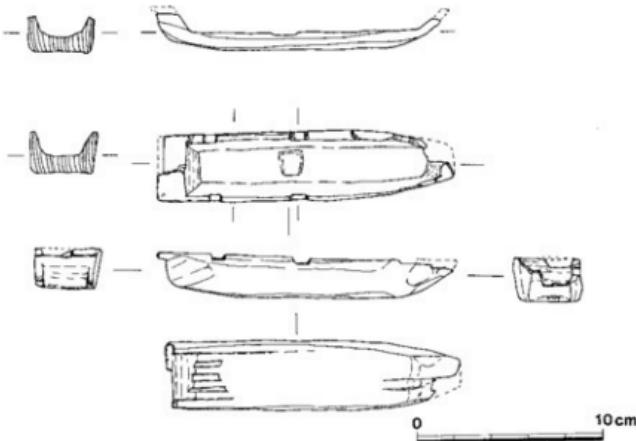


fig. 153  
SE01出土木製  
舟形実測図

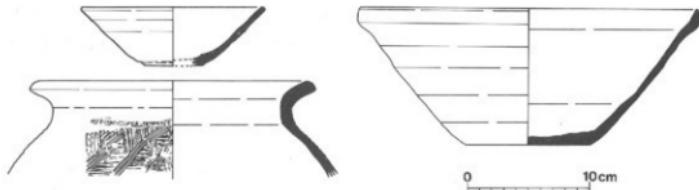


fig. 154 SE01出土土器実測図

## Ⅱ. 板木遺跡

### 第4トレンチ

第4トレンチはそのほとんどが、旧谷口川の流路跡と考えられる砂・シルトの堆積したものである。この旧河道は、前記の昭和60年度における谷口川改修工事に伴う発掘調査時に検出された旧河道の続きである。旧河道内の埋土は排水路の基底レベル以上ののみ調査を行ったため、完掘に至らなかった。遺物も埋土上層の中世の須恵器や土師器の小片がわずかに出土したのみである。ただし、一部で堆積状況を調べるため断ち削り調査を行った結果、砂層より7世紀末から8世紀初めごろのものと思われる台付長頸壺の体部が出土している。付近ではこの時期の遺跡は知られておらず、あるいは如意寺草創時期を知る手掛かりになるかもしれない。旧河道以外には旧河道埋没後のピット・土坑・溝が検出されたが、削平を受けていると思われ、どれも浅く、中世の土師器の小片がわずか出土したのみである。



fig. 155 第4トレンチ調査地位図 1:2,500

7. 如意寺塔跡址・朽木遺跡

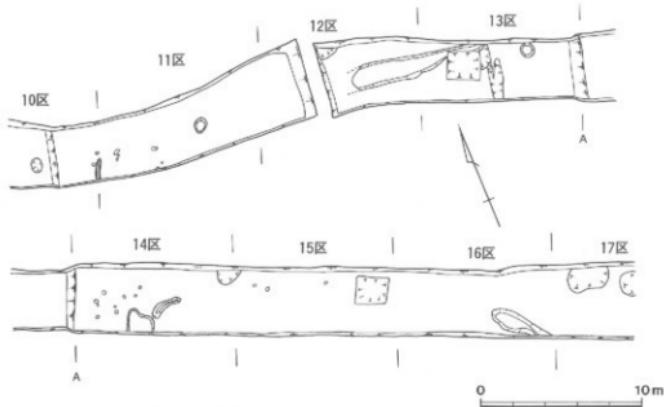


fig. 156 第4トレンチ 中世遺構平面図



fig. 157  
第4トレンチ  
10~11区中世遺構



fig. 158  
第4トレンチ  
13~15区中世遺構

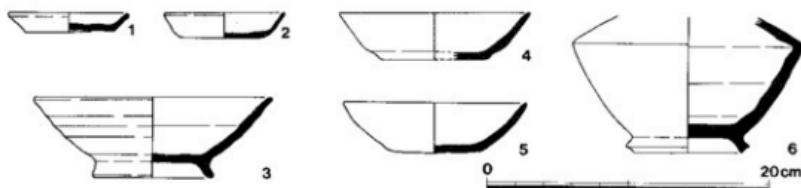


fig. 159 第4トレンチ河手上層出土土器実測図

1・3～5：土師器 2・6：須恵器

### 3. まとめ

第1～3トレンチでは中世から近世の如意寺塔頭の施設の一部が見つかった。調査は、山際を通る排水路予定部分のみの調査であったため、明確な建物跡は検出されなかった。しかし第2トレンチc区では中世の石敷造構、d区では近世の遺物を多量に含む落ち込み、第3トレンチでは中世の井戸と近世の排水浄化槽が見つかり、中世から近世にかけての塔頭での僧侶等の生活の一部を知ることができた。

出土遺物より、第1～4トレンチの中世の造構は13世紀後半から14世紀ごろの造構と考えられる。近世の造構は18世紀代が中心と思われる。

以上のことより、今回の調査区内の塔頭は、中世中ごと、近世の二時期に存在したと考えられる。

『播磨明石之保比金山如意寺旧記』（以下『旧記』と略す。）によれば12世紀から13世紀にかけては將軍家から御教書、御代官・保司などから寄進状が記録されており、13世紀後半の弘安5年（1282）にも地頭領家より寄進があり、諸堂を修営したとある。如意寺蔵の『龍池ノ銘ノ写し』によれば、至徳2年（1335）には、三重塔が再建されている。このように、今回の調査で見つかった中世の造構の時期は、如意寺が中世において最も繁栄した時期であり、谷中には多くの塔頭が存在したと考えられる。しかし、その後15世紀初頭の応永13年（1406）には大洪水、台風、大地震等があり『旧記』に「堂宇諸棲悉く頽落す」とあるように、多くの塔頭も被害にあったものと思われる。また、室町時代後期の応仁の乱以降、戦国の動乱期にあって、15、16世紀は寺運も衰微したものと考えられる。近世になって世の中が静まったころ慶安元年（1648）に境内高43石余並山林竹木諸役免除の朱印を受けそれ以降再び寺運も繁栄し、塔頭も建てられるようになったと思われる。その時期のものが、今回の近世の造構である。江戸期においては明石八山の隨一にして寺運も安定していたが、明治に入り農地改革と廃仏毀釈運動の中で寺運も衰微し、谷中の塔頭もなくなり水田と化し今日に至っている。

8. ようだ  
8. 養田遺跡

## 1. はじめに

養田遺跡は昭和45年度に行われた圃場整備事業の工事中に発見されたもので、弥生時代～平安時代にかけての複合遺跡であることが確認されている。昭和45・46年度の調査は、A～E地区と呼称される字長崎～殿下にかけての地域で実施し、溝状造構・土器溜め造構（平安時代）、方形竪穴住居（古墳時代後期）、掘立柱建物・円形竪穴住居（弥生時代後期）等の遺構が検出された。しかしながら、当時はこれほどの多大な成果を収めたにもかかわらず、養田地区における他の地区は全く調査を実施しないまま、圃場整備事業は進められてしまった。

今回の調査はこれらの経緯を受けて、パイプライン敷設予定地における現圃場下の埋蔵文化財の有無および保存状況を確認しながら調査を進めることになった。



fig. 160 調査地位置図 1:5,000

## 2. 調査の概要

調査は今年度パイプライン敷設工事予定地を対象として試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の存在する範囲についてはトレンチ調査を実施した。

### (a) 試掘調査

今年度パイプライン敷設工事予定地に  $1 \times 2\text{ m}$  の試掘坑を合計30ヶ所設定して重機と人力を併用して調査を実施した。

このうち、埋蔵文化財が確認できたのは5試掘坑を数え、いずれも平安時代後半～鎌倉時代前半の遺物包含層を検出している。

この試掘結果を踏まえて、農政当局に保存要望を行ったが、設計変更不可能の回答を受けて、引き続きトレンチ調査を実施した。

### (b) 1トレンチ

T.P. 1を設定した圃場で、長福寺が位置する西方へ延びる丘陵部分にあたり、養田公会堂のすぐ西側に接する部分である。幅約1m、長さ約70mのトレンチを設定して調査を実施した。

0～2区にかけては先の圃場整備工事の際削平を受けたようで、遺構・遺物包含層は全く検出できなかった。

5～6区にかけては遺構が集中しており、溝状造構1条(SD01)、土坑1基(SK01)の他ピットを若干検出している。

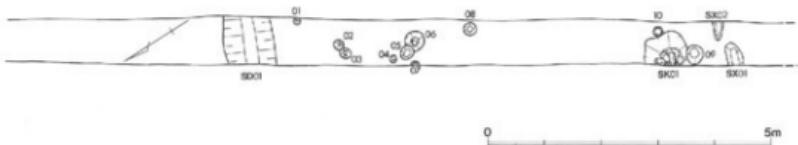


fig. 161 1トレンチ 5～6区 平面図

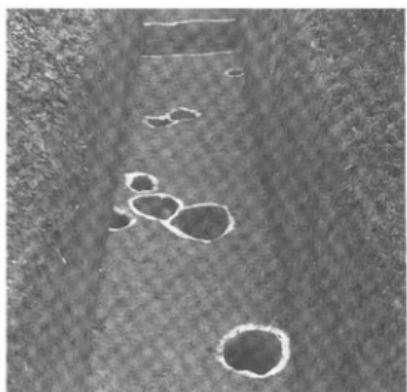


fig. 162 1トレンチ SD01とピット

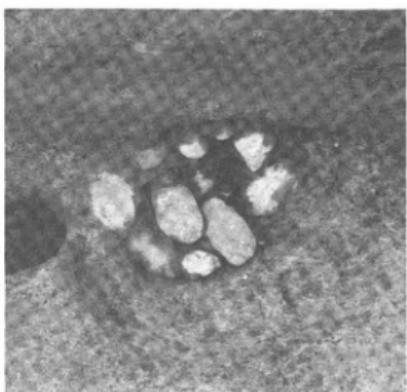


fig. 163 SK01

- SD01 幅0.9m、深さ10cmを測る溝状遺構で、丘陵の等高線に平行するように営まれる。埋土は單一層で、暗灰色粘質土より成る。
- SK01 直径85cmを測る土坑である。坑壁に沿ってこぶし大から人頭大の川原石が敷かれており、その上には炭灰層が堆積する。石材は一部火を受けているようであるが、坑壁までには至らない。炭灰層より若干の遺物を検出している。
- ピット 直径10~30cmを測り、深さもさまざままで、最も深いものは38cmを測る。調査面積が限定されていたため、掘立柱建物の柱穴であるかは断定できない。
- (c) 2トレンチ T.P. 16・17を設定した部分で、東方より伸びてきた丘陵突端のゆるやかな南向きの斜面地にあると考えられる。幅約1m、長さ約50mにわたるトレンチを設定して調査を実施した。
- 試掘調査では鎌倉時代前半の遺物包含層を検出しており、遺構の検出が期待されたが、淡褐色シルト質極細砂から成る基盤層が不安定な点に加えて、暗渠等の搅乱も多いことから全く遺構は確認できなかった。
- (d) 3トレンチ T.P. 28を設定した圃場である。幅約1m、長さ約57mにわたるトレンチを設定して調査を実施した。
- 遺構面は西半部の3~5区にかけて2面認められ、1面目に平安時代後半~鎌倉時代の遺構が営まれ、須恵器・土師器を検出した。2面目では遺構は確認できなかったが、弥生時代後期~平安時代前半の遺物包含層を確認し、弥生土器・須恵器・土師器を検出した。
- 1面目の遺構には、土坑1基(SK01)、溝状遺構1条(SD01)、ピット4(SP01~04)などがある。



fig. 164 3トレンチ SK01

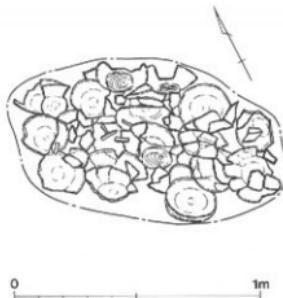


fig. 165 SK01 平面図

SK01 3区で検出した長径115cm、短径65cm、深さ約15cmを測る楕円形の土坑である。坑内には15個体以上の土師器塊が一括放棄されている。

これらの土師器は、口径7~11cmを測る小型の塊形態をとるもので、いずれもロクロ回転によって成形・調整され、底部は回転糸切り未調整のようである。しかし、口縁部に亜みが多いこと、口径にばらつきがあり規格性のこと、これらが一括放棄されていることなどよりみると、祭祀等の特殊な用途に供されたものと考えられる。時期比定については現段階では平安時代後半~鎌倉時代に収まるものとできよう。

SD01 4区で検出した幅1m、深さ約20cmの南北方向に走る溝状遺構である。埋土は乳褐色砂質土より成るが、全く遺物を含まなかった。

ピット 合計4個確認しているが、いずれも直径20~25cmを測るものである。柱痕を全く検出できなかったため、柱穴となるかどうかは不明である。

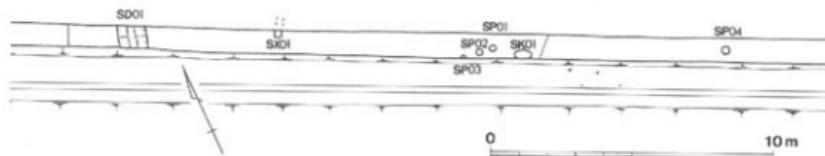


fig. 166 3トレンチ平面図

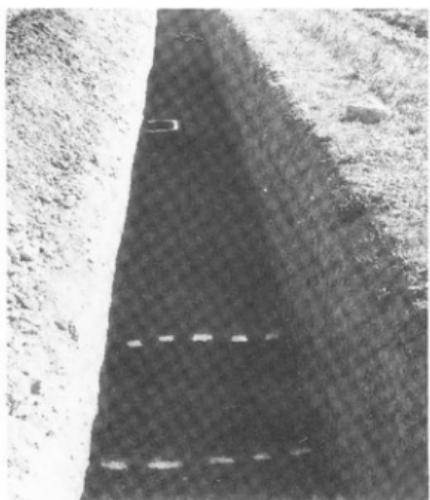


fig. 167 3トレンチ全景

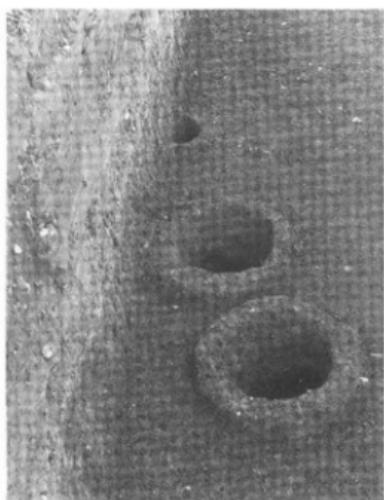


fig. 168 SP01~03

(e) 4 レンチ 3 レンチ 1 区西半より北へ延びるレンチで、幅 1m、長さ約 20m を測る。

造構面は乳褐色礫混じり粘質土から成り、北端では茶褐色砂礫層に変化する。遺構は全く確認できなかったが、造構面直上より須恵器・土師器を若干検出した。

(f) 試掘調査 来年度以降パイプライン施工予定路線の圃場に適宜  $2 \times 2$ m の試掘坑を設定して人力によって調査を実施した。合計 22ヶ所の試掘坑により調査を実施し、T.P. 31・40～43において埋蔵文化財が確認された。

T.P. 31 では、黄色褐色礫混じり粘質から成る基盤層が認められ、弥生時代後期のピット・土坑などの遺構と遺物包含層を検出した。また、遺構は確認できていないが、平安時代後半～鎌倉時代前半の遺物包含層も確認している。出土遺物には、弥生土器・サヌカイト・須恵器・土師器・白磁などがある。

T.P. 41 では、古墳時代前期（布留式併行）のピットと遺物包含層を確認し、土師器を検出した。

また、T.P. 40・42 では遺物包含層は認められないものの、T.P. 41 と同一の安定した基盤層が存在するため、遺構の確認される可能性は高い。

T.P. 43 では、遺構は確認できていないものの、淡灰色砂質土から成る鎌倉時代前半の遺物包含層を確認し、須恵器・土師器を検出した。

なお、上記した試掘坑以外では埋蔵文化財は全く確認できなかった。



fig. 169 調査地全景

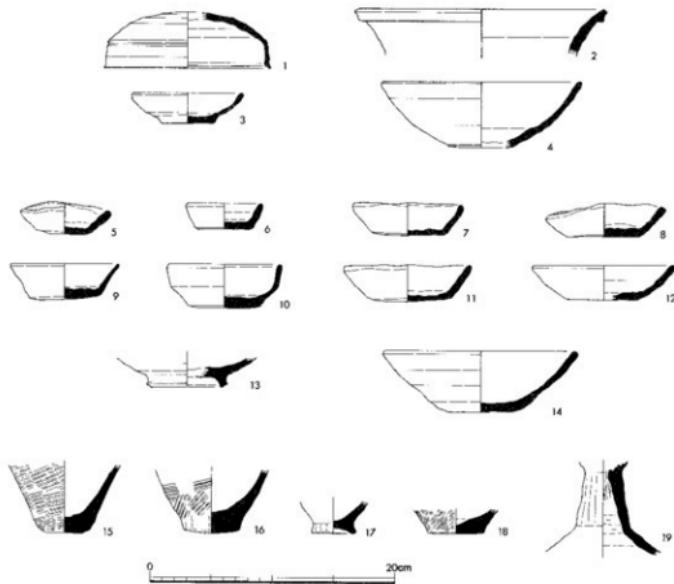


fig. 170 出土上器実測図

1~4: 2トレンチ 5~14: 3トレンチ(5~8: SK01) 15~18: T.P.31 19: T.P.41

### 3.まとめ

今回の調査では、調査面積が限られていたにもかかわらず、様々な資料を収集した結果、農田遺跡の内容に追加する成果を得ることができた。

まず、弥生時代後期の集落址がより広範囲に及ぶことが確認できたことが挙げられる。先の調査においてはベッド状遺構を伴う大型円形竪穴住居が確認されており、今後の調査によって集落構成が明らかになっていくものと思われる。

次に、古墳時代前期の布留式併行期の遺構が確認されたことは、農田地区の集落変遷を考え行くうえで意義深いものである。少なくとも、弥生時代から古墳時代後期まで続く集落の存在を想起することができよう。

埋蔵文化財の状況が判然としなかった農田地区は、かなり大きな集落であったことが、今回の調査で明らかになった。その実態は今後の調査によってさらに明確になっていくであろう。

てんのうざん  
9. 天王山5号墳

## 1. はじめに

天王山5号墳は永井谷川と伊川の合流地点近、永井谷川右岸の丘陵上に位置する。同じ丘陵上には天王山1-1、1-2、2、3、4号墳が、また小谷をへだてた南の薬師山とよばれる丘陵上には墳長70mの古墳時代前期の前方後円墳瓢塚古墳がある。

5号墳頂部の標高は70.1mで、ふもとの平坦地との比高差は40mほどをはかる。川沿いのこの平坦面には集落遺跡が存在し、池上北遺跡などで弥生時代中期から後期、古墳時代、中世の遺跡が調査されている。

昭和61年10月下旬、天王山古墳群が盗掘されると市民から通報があった。11月5日に係員が現地に向かい、5号墳、古墳参考地の2か所が盗掘されているのを確認したが、遺物は確認されなかった。



fig. 171 調査地位図 1:5,000

この後、11月17日に土地所有者から分布・試掘調査依頼が提出され、これにもとづき、試掘調査を12月17日から開始した。墳丘裾部の確認のため周辺部を踏査したところ、石棺と思われる破碎された石材片が丘陵一帯に散乱しているのを発見した。警察、県教育委員会にこの事実を報告し、いったん調査を中止し、以降の調査について協議を行った。

この結果、盗掘された埋葬施設の発掘と墳丘規模の確認を目的とする発掘調査を行うことになった。

## 2. 調査の概要

天王山5号墳 東西21m、南北16mほどの長方墳である。墳高は現状で約2mをはかる。墳丘の北側と東側で墳丘を画する幅約1mのテラス面が検出された。葺石や埴輪の類は確認されなかった。

埋葬施設 墳頂部において4基の埋葬施設が確認された。

1. 石枕をもつ赤く塗彩された組み合わせ式石棺の東埋葬施設
2. 割竹形木棺の中央埋葬施設（以上の2基を発掘）
3. 中央埋葬施設の南側と北側に南埋葬施設・北埋葬施設

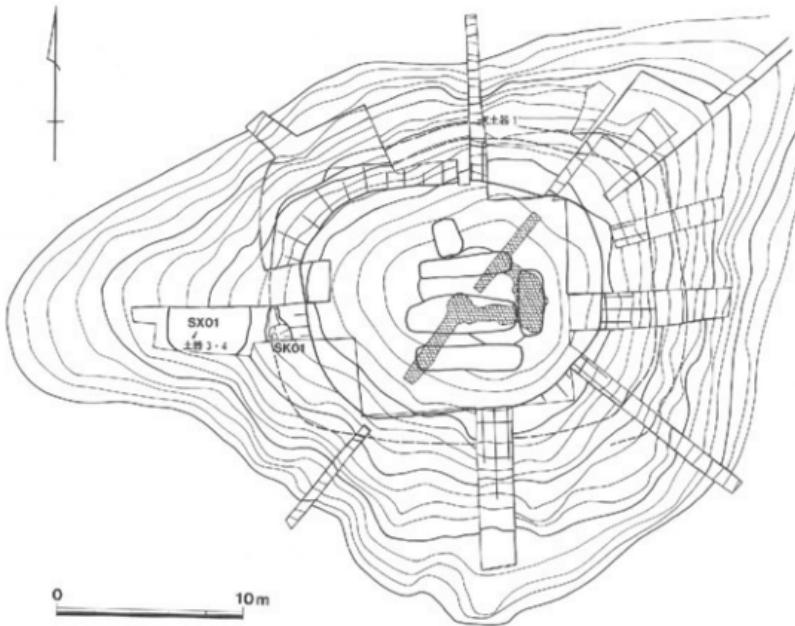


fig. 172 墳丘実測図

各埋葬施設の規模は次表のとおりである。

	掘形の規模			棺の規模		
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ
1号主体(東 棺)	3.4m	1.3m	0.7m	2.6m	0.6m	0.6m
2号主体(中央棺)	5.9m	2.0m	1.0m	5.9m	2.0m	1.0m
3号主体(北 棺)	5.0m	1.1m	—	—	—	—
4号主体(南 棺)	5.7m	1.3m	—	—	—	—



fig. 173 墳丘全景



fig. 174 中央埋葬施設

#### 副葬品

中央埋葬施設の棺床面から鉄剣（あるいは鉄槍）片と土器片が出土している。鉄剣は鞘部分も遺存しているが、盗掘のため、鋒部分以外は失われている。土器片は高環形土器あるいは器台形土器の口縁部と思われる。胎土はもろく、風化がすんでいる。

徹底的な破滅をうけた東埋葬施設には副葬品は残されていなかったが、盜掘の際の排土中から骨片が出土している。

#### 5号墳以外の 遺構

5号墳の墳丘西側部分に幅約1.4m、深さ約0.8m、長さ2m以上の土坑（SK01）が、またその西に広く浅い落ち込み（SX01-62年度の調査により、6号墳の墓壙掘形であることが確認された）が確認されている。前者からの遺物の出土はなかったが、後者からは、覆土中から須恵器が出土している。

また、5号墳の東にある古墳参考地、両者の間の尾根上およびその周辺についてもトレンチによる確認調査を行った。古墳参考地では時期不明の溝状の遺構が検出されたが、その他の地点では遺構・遺物とともに検出されなかった。

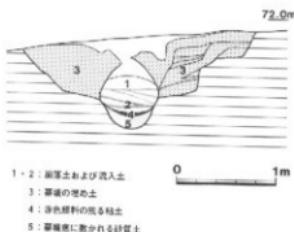


fig. 175 中央埋葬施設断面図

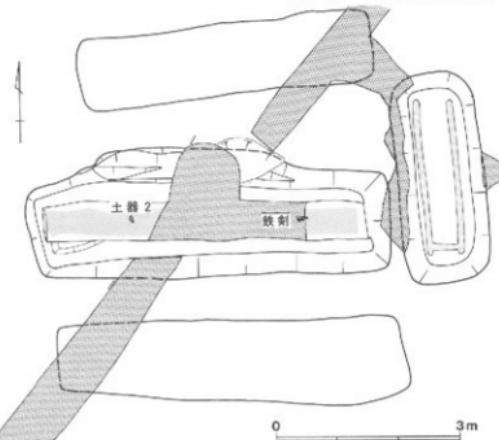


fig. 176 埋葬施設平面図

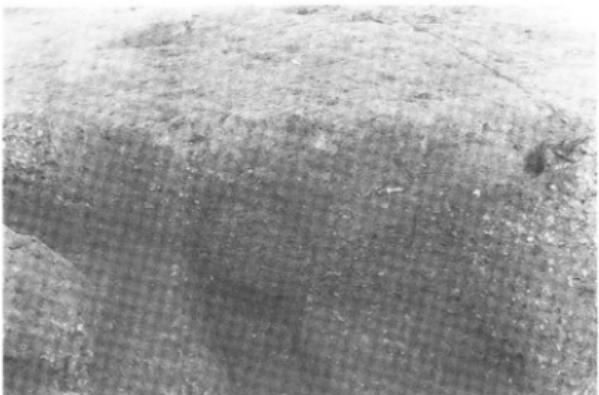


fig. 177  
盗掘によりあらわれた中央  
埋葬施設断面



fig. 178  
中央埋葬施設西半棺床面  
検出状況



fig. 179  
中央埋葬施設東半鉄剣  
出土状況

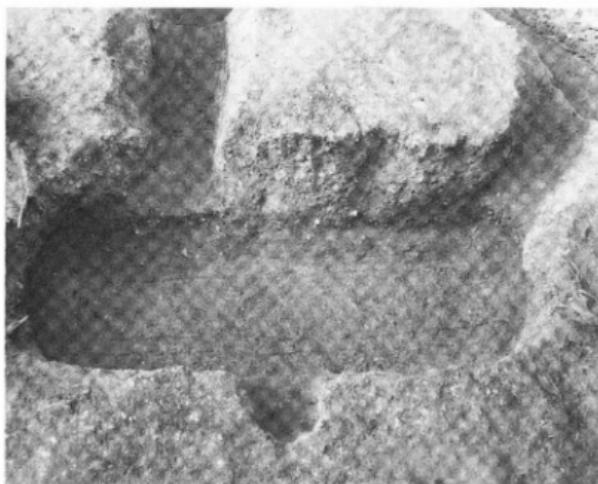


fig. 180  
東埋葬施設掘形

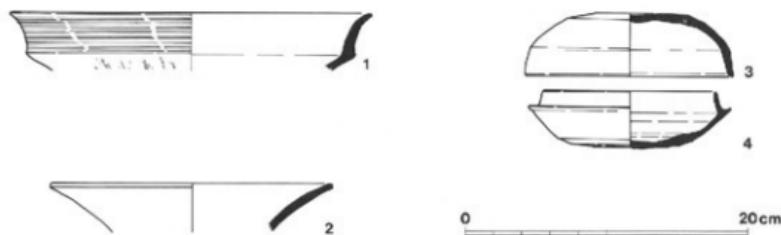


fig. 181 出土土器実測図 1：北トレンチ 2：中央埋葬施設床面 3・4：SX01

### 3.まとめ

埋葬施設の発掘調査は、盗掘により大きく破壊をうけたもの2基のみについて行った。その結果、中央埋葬施設が削竹形木棺、東埋葬施設が組み合わせ式石棺であることが明らかとなった。

盗掘をまぬがれた副葬品は鉄剣の残欠などごく僅かであり、副葬品だからこの古墳の年代的位置づけを行うことは困難である。しかし、埋葬施設のありかたからすれば、古墳時代前期をくだることはないと推定することができる。

## 10. 狐塚古墳

### 1. はじめに

昭和54年頃、神戸市垂水区狩口台6丁目、7丁目の市営住宅内の休閑地に、新たな住宅を建設する計画が神戸市住宅局から発表され、同計画にかかる埋蔵文化財上の問題について神戸市教育委員会に協議が求められた。教育委員会は、当該地の分布調査を実施し、建設予定地内の3ヶ所の地点について遺跡確認のための事前調査が必要と回答した。昭和54年6月から約2ヶ月間、これら3ヶ所の遺跡確認調査を実施した結果、第1地点、第2地点ともかなり地山面が削平されており、遺跡の存在は確認されなかつた。また、第3地点については狐塚古墳として紹介されている地点であるが、古墳であるかどうかを確認することと、古墳であれば、墳形・規模・埋蔵形態を調べるための調査を実施した。この結果、横穴式石室を主体とした、径25mの円形墳であることが確認された。この古墳裾をめぐる堀の外側にも堀が検出され、二重にめぐっていた可能性が強くなつた。また、古墳確認調査中、墳丘盛土内から弥生時代の土器片や石鎌、石包丁などが出土している。

今回の確認調査は、これらの結果をもとに、古墳の範囲を確かめると同時に周辺に弥生時代の遺跡が存在するか否かを確認する調査を実施した。



fig. 182 調査位置図 1:5,000

## 2. 調査の概要

### 第1トレンチ

狐塚古墳の南側に設定したトレンチである。地山面まで比較的浅く、トレンチ端から5m南で幅3m、深さ20cmの浅い落ち込みを検出した。上層は黒褐色土で、前回調査した時の狐塚古墳外側の堀と同種のものと思われる。トレンチ中央部では、幅1m、深さ10cmの暗赤褐色弱粘質土の浅い溝跡を検出した。溝の埋土内から少量の弥生土器片が出土している。この溝の横から弥生土器片を含む径30cm、深さ30cmの小ピット1か所を検出した。トレンチの南側は一度荒造成されたらしく一段落ち込み、ガラを含む盛り土で埋められていた。その他、トレンチ内から溝やピットが数箇所検出されているが、遺物はなく、埋土から見て後世のものと思われる。

### 第2トレンチ

第1トレンチの東側約1.5mに第2トレンチを設定した。第2トレンチの北側も地山面まで比較的浅く、遺物包含層は認められなかった。また、第1トレンチ同様、狐塚古墳の外堀と思われる幅3m、深さ20cmの浅い落ち込みを検出した。ここでも数箇所のピットを検出したが遺物はなく時期は不明である。

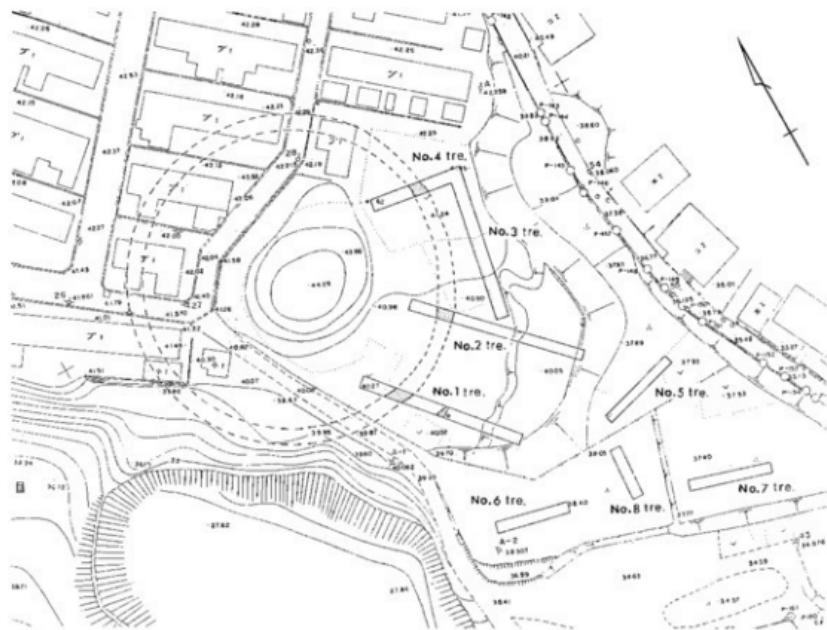


fig. 183 トレンチ位置図 1:1,000

10. 狐塚古墳

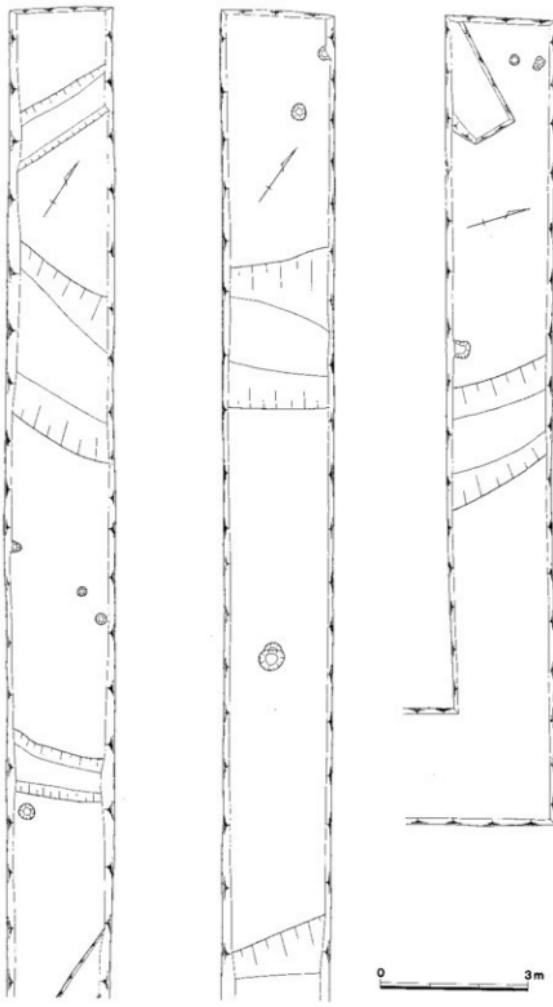


fig. 184

トレンチ平面図  
(左) 第1トレンチ  
(中) 第2トレンチ  
(右) 第4トレンチ

- 第3トレンチ 第2トレンチのほぼ中央あたりから北へトレンチを設定し調査したが、後世の溝やピット以外、遺物・遺構は検出されなかった。
- 第4トレンチ 第4トレンチ北端から直角に、狐塚古墳まで第3トレンチを設定した。表土直下は地山であったが、トレンチ中央部で第1トレンチ、第2トレンチ同様の幅2.5m、深さ15cmの黒褐色土を含んだ浅い落ち込みが見られた。また、表土中より弥生土器片が出土しているが、遺構や遺物包含層は確認されなかった。
- 第5トレンチ 南側の現地形で約2m低くなっている場所に第5トレンチを設定したが、表土下は地山で遺物・遺構は検出されなかった。
- 第6・7・8 ネットフェンスが張られている敷地のさらに南側の空地に、第6、7、トレンチ 8の3本のトレンチを設定したが、いずれも一度荒造成を受けていた。地山面は深いが、すべて盛り土で遺物・遺構は検出されなかった。



fig. 185  
狐塚古墳と調査地



fig. 186  
第1トレンチ

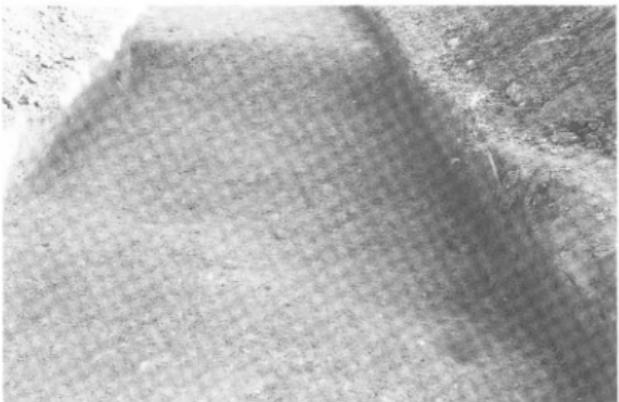


fig. 187  
第1トレンチ狐塚古墳  
外観



fig. 188 第1トレンチ  
弥生時代溝およびピット  
検出状況

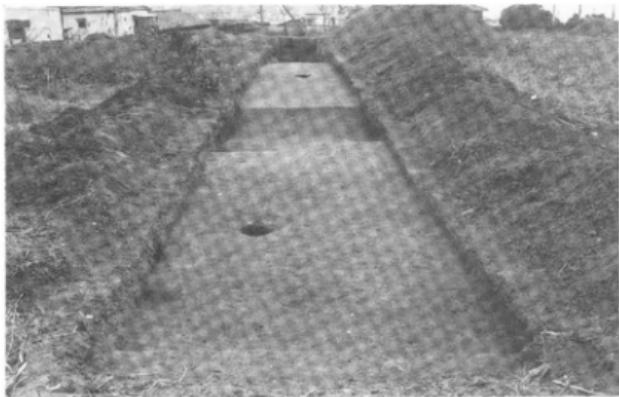


fig. 189  
第2トレンチ全景

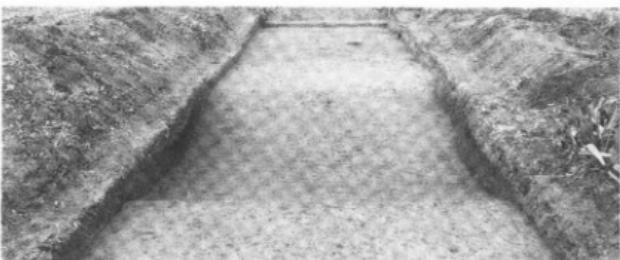


fig. 190 第2トレンチ  
狐塚古墳外堀



fig. 191  
第3トレンチ全景

### 3.まとめ

以上、各トレンチの調査概要を述べたが、第1・第2・第4トレンチで検出された浅い落ち込みを結ぶと、狐塚古墳をめぐる形になる。さらに前回54年に調査した時の溝を結ぶと直径60m弱になり、二重の堀を持ったかなり大きな古墳である。

第1・第2トレンチの北側及び第3・第4トレンチは地山面まで浅く、また、狐塚古墳の外堀も15~20cm程度の深さしかない。おそらく後世に、狐塚古墳の裾から周辺部はかなり削平されたと思われる。また、第1・第2トレンチの南側や第6~第8トレンチ周辺は荒造成を受けた後、再度盛り土で現地形に埋め戻されていた。

今回の調査で弥生土器片が少量ながら出土している。また、第1トレンチでは、弥生時代の溝とピットが検出された。これから、狐塚古墳周辺部に弥生時代の遺跡が存在している可能性は強い。しかし、古墳の南と東側はかなり削平を受けているため、遺跡の残存度は低いと思われる。また、時期を確定できる土器は皆無であった。

## 11. 五色塚古墳

### 1. はじめに

当該地は、史跡五色塚古墳の東に隣接する旧舞子病院跡地である。過去2度の試掘調査が実施され、五色塚古墳の周溝、近世墓、そして今回の試掘調査対象地区で埴輪片を包含する溝が確認されていた。

今回の試掘調査は、病院建物が撤去されたため、その部分に遺構が存在するか否か、前回確認された埴輪を包含する溝の方向の確認を目的とした。

### 2. 調査の概要

トレーンチは原則として幅2mで、8m間隔で5本設定した。1・2トレーンチは盛土が厚く、重機で掘削を行った。

盛土下は、近世以降の水田あるいは畠土が存在した。その下は、ほぼ水平な地山面が存在することから、耕地化する際に大がかりな造成の行われたことが推察される。

#### 第1トレーンチ

第1トレーンチは、南約4分の1を除いて、すべて削平された地山面が現れ、遺構・遺物の出土はなかった。南端は、昨年度調査で溝が確認されている部分で（第5トレーンチS D 02）、この付近は自然堆積土層が残存する。しかし、自然堆積土層中の遺物は確認できなかった。

#### 第2トレーンチ

第2トレーンチも第1トレーンチ同様、北約3分の2は削平された地山面が現れ、遺構・遺物の出土はなかった。南端で自然堆積土層が残存し、ピット4ヶ所、溝1条を検出した。その幅は50~60cm、深さ60cmで、断面形はU字形である。埋土中から埴輪片・土錐が出土した。土錐は土師質で、長さ3.5cm、最大径1.0cmで、長軸方向中央に円孔を貫通させる形態である。



fig. 192 調査地位図  
1 : 5,000

第3トレンチ

第3トレンチは、現表上下約40cmで遺構面に達する。当トレンチでもやはり溝を検出したが、第2トレンチのそれとは方位を全く異なる。溝は、幅120cm前後、深さ40cmである。埋土は第2トレンチの溝と同様のもので

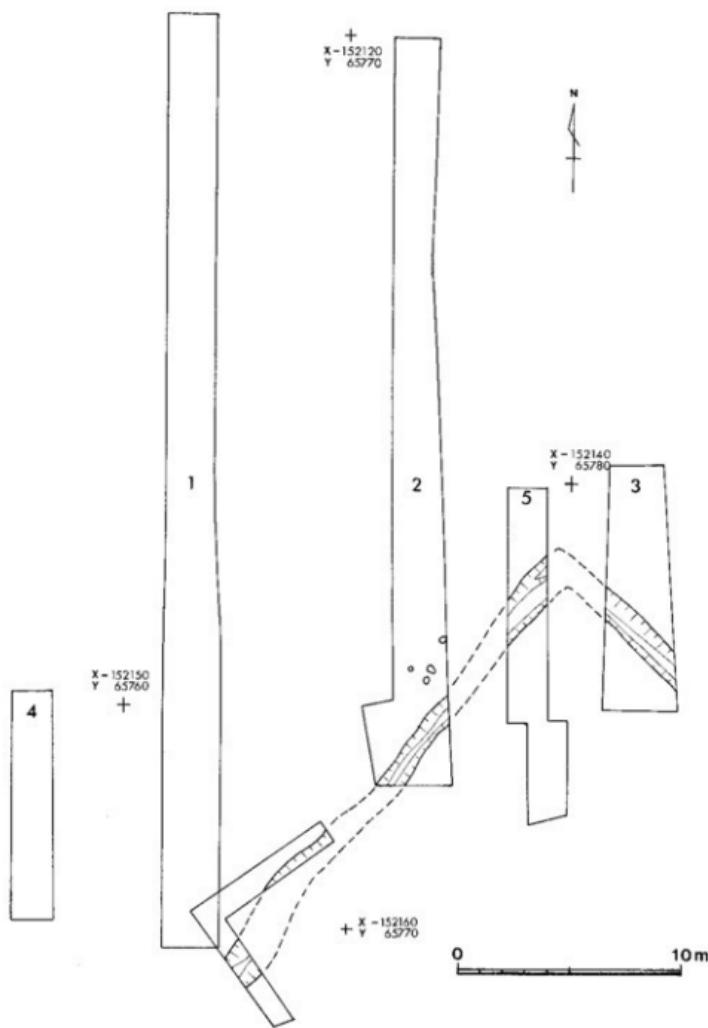


fig. 193 トレンチ・遺構全体図

あるが、現表土直下で地山が現れ、この付近も相当削平されていることが判明した。

**第5トレンチ** 第5トレンチは、第2・3トレンチで検出した溝の連続性をとらえるために設定した。溝は、第2トレンチと同一方向で検出され、その幅130cm前後、深さ20~40cmであった。埋土中から40数点の埴輪片が検出された。溝の直上に堆積する土層からは、室町時代に属すると思われる土師器焼、備前焼擂鉢が出土した。

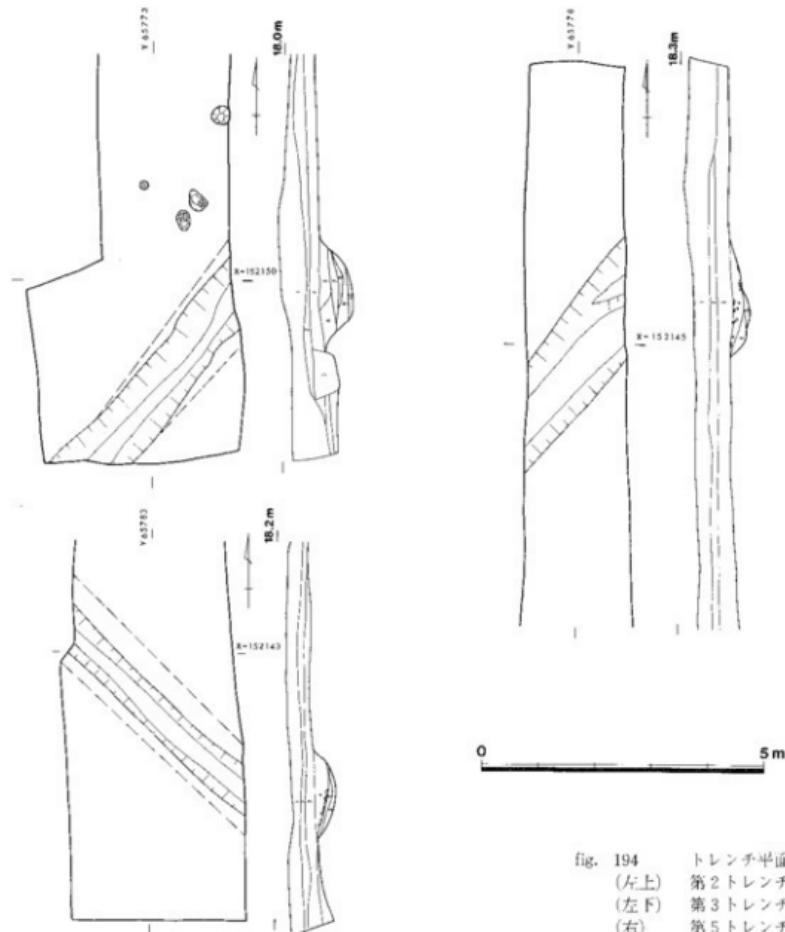


fig. 194 トレンチ平面図  
 (左上) 第2トレンチ  
 (左下) 第3トレンチ  
 (右) 第5トレンチ

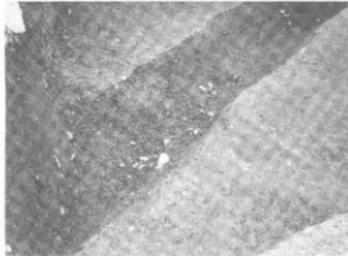


fig. 195 第2トレンチ 溝

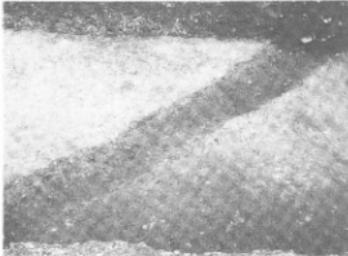


fig. 196 第3トレンチ 溝



fig. 197 第5トレンチ 溝



fig. 198 第2・3・5トレンチ

### 3.まとめ

今回の調査では、昨年度調査で出土した溝に連続すると考えられる溝が出土し、その溝は、ほぼ直角に屈曲することが確認できた。溝の底面レベルは、第2トレンチから第3トレンチに向けて徐々に上がっており、その差は約60cmある。埋土中から出土した埴輪は、大部分が円筒埴輪で、若干の器財埴輪が混じる。円筒埴輪片には、ヒレ・タガの部分があり、その貼付手法・形態は五色塚古墳出土のそれに酷似する。このことから、溝が構築された時期は、五色塚古墳築造からさほど遠くないと考えられる。

溝の性格については、様々に想像をめぐらせることはできようが、出土遺物が埴輪片のみで、その他に上鍤が1点だけであるから、一般的な生活遺構に伴うものとは考えられない。おそらくは、五色塚古墳あるいは、その周辺に存在したと伝えられる古墳と密接なつながりを持つ遺構と考えた方がよいであろう。

なお、この溝は、第5トレンチ出土遺物が示す時期、すなわち室町時代頃に1度削平を受けていると考えられる。したがって、本来はその幅、深さとも現在を上回っていたであろう。

## 12. 舞子古墳群毘沙門1号墳

## 1. はじめに

今回調査を実施した地点は、現在舞子墓園が営まれている舞子丘陵の西端の頂上付近に位置する。標高は約82mを測り、海岸線まで直線距離にして約1kmである。

周辺の代表的な遺跡としては、西北西約500mに投上銅鐸出土地、西南西約650mに大歳山遺跡（弥生時代後期）、南東約2kmには五色塚古墳・小塗古墳（古墳時代前期）などがある。

舞子丘陵には、既往の調査で先土器時代・弥生時代後期の遺跡と古墳時代後期の横穴式石室墳が存在することが知られている。

弥生時代後期の遺跡は以前から舞子丘陵上で弥生土器片が採集され、その存在は充分予想されていた。昭和57・59年度の墓園造成に伴う調査で東石ヶ谷地区において竪穴住居が5棟確認された。

また一方、古墳時代後期の横穴式石室墳は舞子古墳群と呼ばれ、かつては60基前後で構成されたと考えられる。しかし、現在では20基弱を残すだけとなっている。舞子古墳群の調査は昭和25年星陵高校地歴研究部の分布調査・舞子台支群の略測を初めとして、今まで多くの調査が実施されてきた。以下、これまでの調査件名のみを列記しておく。



fig. 199 舞子古墳群位置図 1:5,000

昭和39年	尼ヶ谷支群	3基
昭和52年度	東市ヶ坂支群	2基
昭和55年度	西石ヶ谷1・2・4・5号墳	
昭和56年度	西石ヶ谷1・3・4・6号墳	
昭和57年度	東石ヶ谷1号墳	
昭和59年度	東市ヶ坂3号墳	
昭和60年度	毘沙門2号墳	
昭和61年度	毘沙門1号墳	

以上のように、舞子古墳群内において発掘調査された古墳は多く、今回の毘沙門1号墳で15基目となる。

毘沙門1号墳が存在したとされる今回の調査地は、昭和60年度発掘調査を実施した2号墳とともに、昭和46年に一夜にして墳丘が削平され、埋蔵文化財は遺存していないものと考えられてきた。

しかし、個人住宅の造成計画に伴って、試掘調査を実施したところ、毘沙門1号墳の石室基底部と周溝、弥生時代後期のピットなどの構造および弥生土器・須恵器などの遺物が確認された。そこで、今回は試掘調査の成果を踏まえて全面発掘調査を実施するに至っている。



fig. 200 調査地全景  
(南から)

## 2. 調査の概要 今回の調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構が確認された。

### (1) 弥生時代後期

**SB01** 調査区の北東隅部で、後述する毘沙門1号墳に切られた状態で、堅穴住居1棟を検出した。後世の削平を受けているため、中央土坑とピット16個を確認したのみで、住居址の規模などの詳細については不明である。

中央土坑は長径120cm、短径105cm、深さ50cmを測るやや歪な円形で、北東方向と南西方向に幅10~20cm、深さ5~8cmの溝が取りついている。柱穴と考えられるピットは16個確認しており、直径は約20~40cmを測る。柱穴の深さもさまざまで、いずれの柱穴が対応して上屋が構成されるのかは明らかでない。

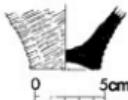


fig. 201 中央土坑  
出土:弥生土器

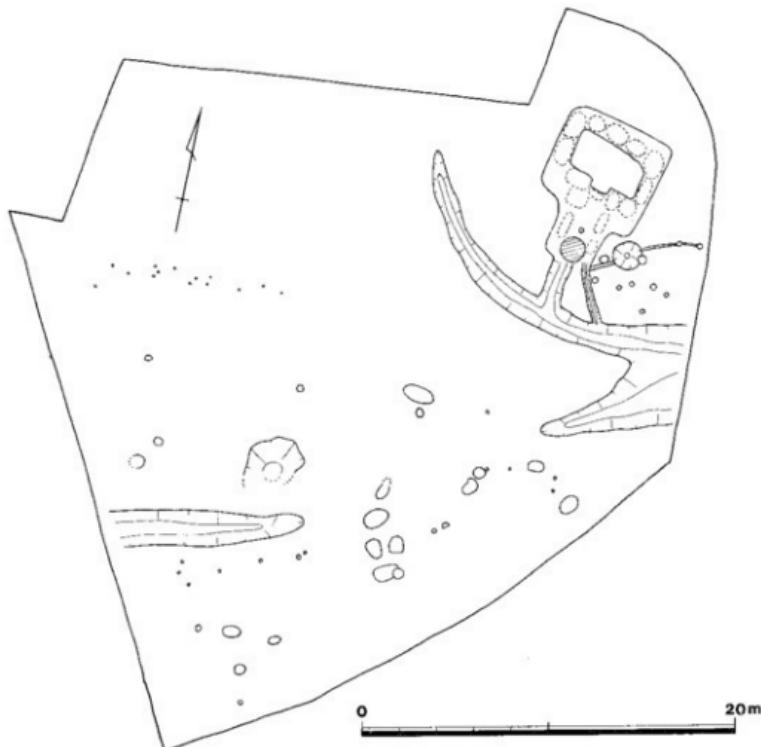


fig. 202 調査地遺構平面図

その他の遺構

その他の遺構には調査区南半で検出した土坑・ピットなどがある。いずれも埋土が淡黄色砂質土からなり、ほとんど遺物を有さない。しかしながら、SP 37は直径約45cmを測るもので、弥生土器片が若干出土している。



fig. 203 S B 01 (南から)

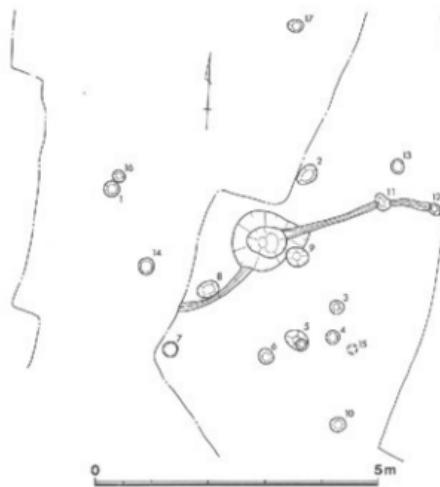
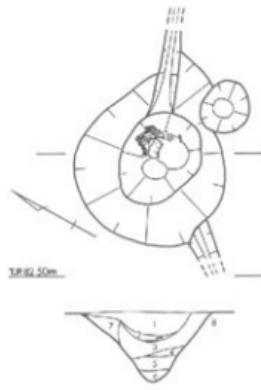


fig. 204 S B 01 平面図



1. 淡黃灰色砂質土 2. 暗茶赤色粘質土 3. 黒灰色砂質土  
4. 黄灰褐色砂質土 5. 黑灰色砂質土 6. 暗灰色粘質土  
7. 黄色粘質土 8. 明黄色粘質土

fig. 205 S B 01 中央土坑平面・断面図

## (2) 古墳時代後期

**毘沙門1号墳** 昭和46年の削平によって全く姿を消したと考えられていた毘沙門1号墳の埋葬施設の基底部と周溝を確認した。

**古墳の規模** 墳丘は削平のため、全く遺存しない。しかしながら、埋葬施設の西側から南側にかけて検出した周溝のカーブより復原すると、約20~25mの墳丘を有する円墳であったと考えられる。

**埋葬施設** 埋葬施設は「T字形」横穴式石室と呼称される形態を探る。壁体構造は全く不明であるが、玄室・羨道・墓道から構成されると考えられる。

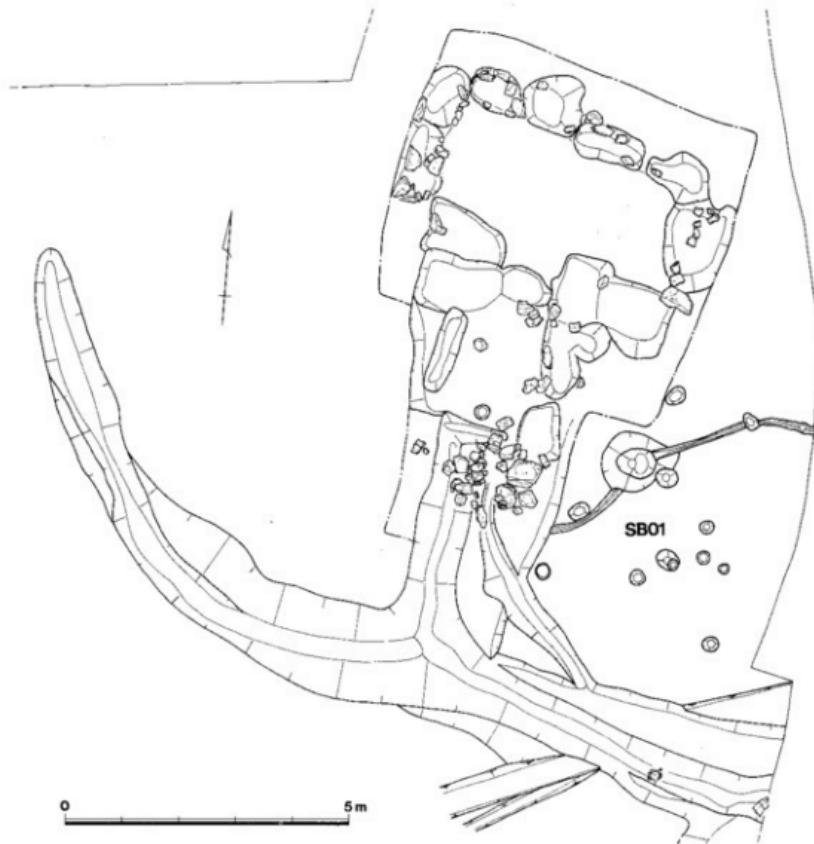


fig. 206 毘沙門1号墳 平面図

**玄室** 玄室は東西長4.0～4.2m、南北長1.8mを測り、南壁のほぼ中央に幅1.05m、長さ0.5mの突出部が取りついている。玄門部に石材抜取痕が存在することから数居石があったものと思われる。床面には玄室プランよりやや狭い範囲に円礫が敷き詰められている。この円礫は床面断ち割り後の観察により、最下段の石材据え付け後に敷かれたことが判る。

**羨道** 羨道は幅1.4m、長さ2.3mを測り、左右2個ずつの石材抜取痕が伴う。床面は赤褐色粘質土から成り、敷石・排水溝等の施設は認められない。床面レベルは玄室より10～15cm低い。また、羨門部には閉塞石と考えられる直径30～50cmの花崗岩の割石が積まれている。

**墓道** 墓道は羨門中央よりやや西側から始まり、南へ行くほど深くなりながら周溝との結束点まで延びる。幅は約90cm、断面は鈍いV字形を呈する。

**排水溝** また、墓道東側に接して南東方向に延びる排水溝が設けられている。

**遺物の出土状況** 遺物は玄室床面を中心にして出土しているが、重機に踏まれたため須恵器は完全に破碎された状態であった。その中でも、玄室北東隅部から奥壁沿いに遺物の集中傾向が認められる。これは追葬の際に副葬品を片付けたためとも考えられるが、詳細については明らかにできなかった。また、玄室から羨道にかけて結晶片岩や紅縞片岩が多数出土していることは特記できる。その帰属は明確にし得ないが、石室の平面形態を含めて興味深い。

その他に、玄室床面の円礫上面よりやや浮いた状態で炭灰層とともに鎌倉時代前半の須恵器碗・瓦器碗が出土しており、当時この石室が再利用されていたことが窺える。

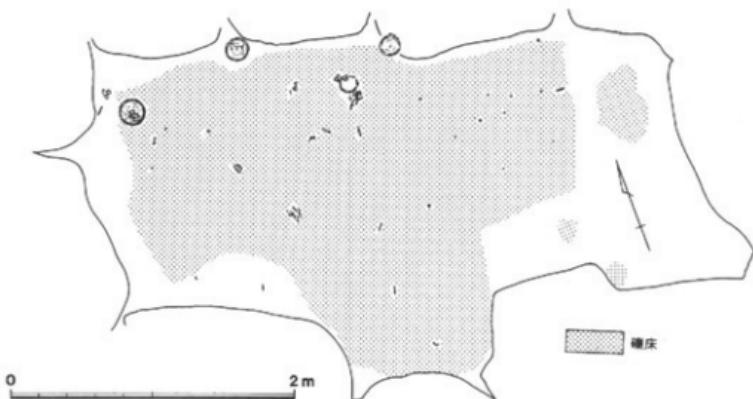


fig. 207 玄室床面遺物出土状況

## 外部施設

外部施設には埋葬施設を取り巻くように営まれた周溝がある。墓道との結束点より西側では漸次深さを減じており、破碎されたと考えられる須恵器群を検出している。東側では須恵器环身と甕を検出している。最大幅は1.7mを測る。

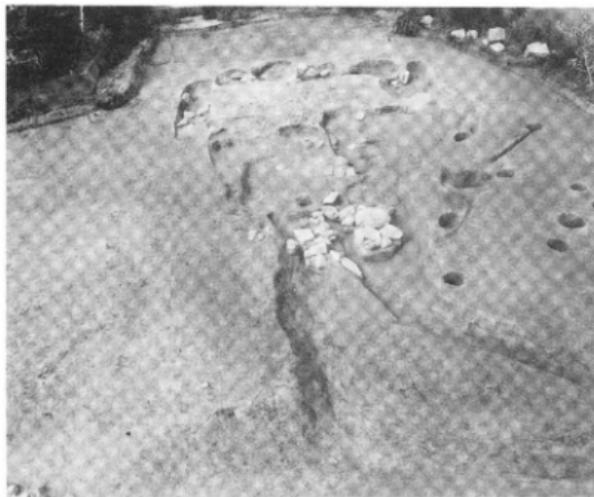


fig. 208 埋葬施設全景



fig. 209 周溝内須恵器出土状況

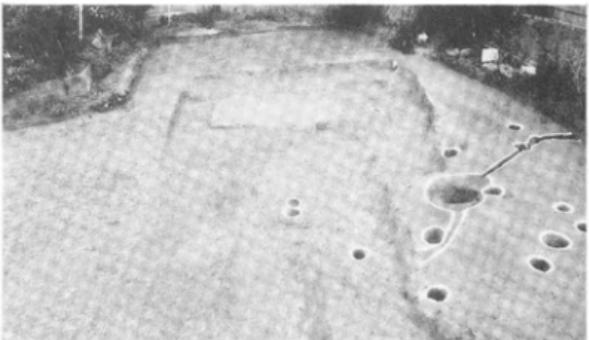
fig. 210  
埋葬施設近景(南から)



fig. 211  
玄室床面凹穂



fig. 212  
埋葬施設掘形全景および  
弥生時代住居址(南から)



## 12. 鞍子古墳群毘沙門1号墳

## 3. 出土遺物

出土遺物の大半は毘沙門1号墳に伴うもので、その他にはS B 01中央土坑より検出した弥生土器（畿内第V様式）がある。

## 毘沙門1号墳の遺物

## 須恵器

須恵器の器種には壺蓋・壺身をはじめとして、高壺・提瓶・壺・台付装飾壺などがある。特に、台付装飾壺には子壺の装飾だけでなく、荷物を担いだ人や動物などの装飾が施されている。

須恵器は壺蓋・壺身の特徴より、陶邑田辺編年のTK 10型式～TK 43型式に比定でき、このことより当古墳は、6世紀中葉に築造され、後葉まで葬送儀礼が継続されていたことが判る。

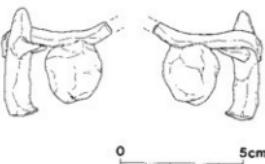
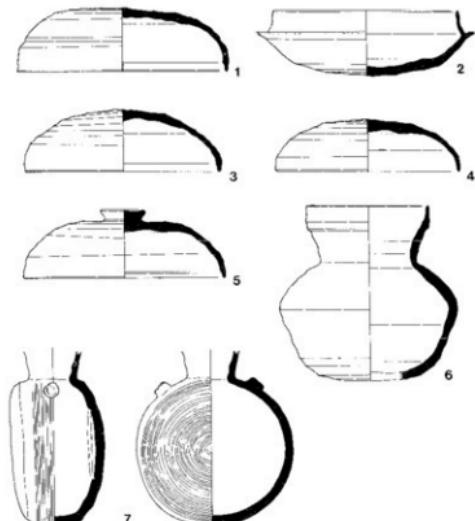


fig. 213 荷を担ぐ人(須恵器)実測図

fig. 214 玄室床面  
出土須恵器実測図

**装身具** 装身具には金環3、銀環1、ガラス玉12、銀製空玉6などがある。

**馬具** 馬具には鉄地金銅張辻金具、鍔などがある。

**武具** 武具には鉄地金銅張胡蘿金具、長頭鎌などがある。

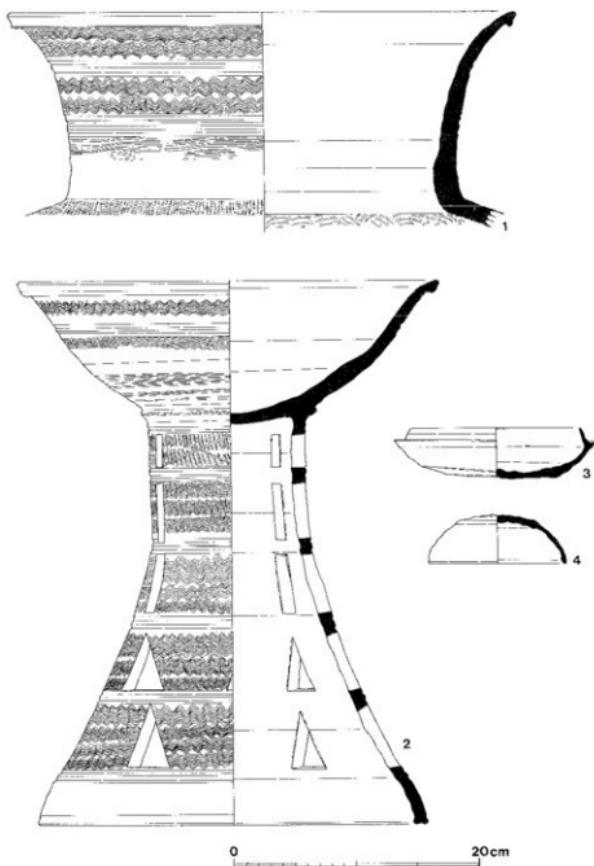


fig. 215 周漢出土須蓄夷測図

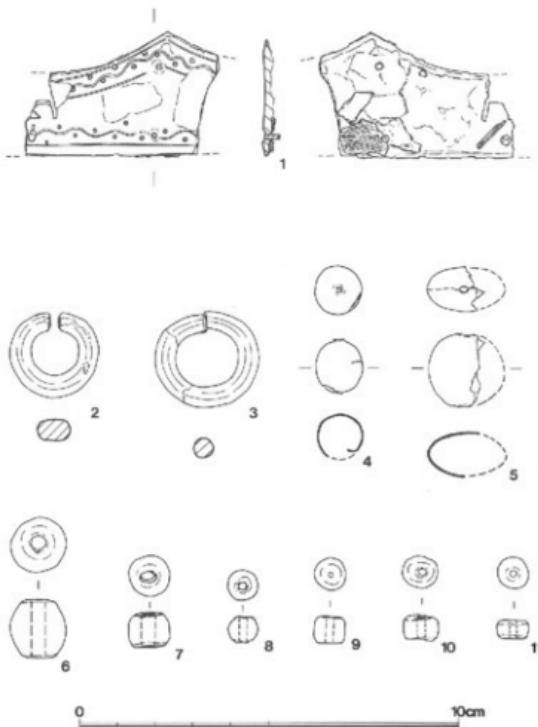


fig. 216  
玄室床面出土遺物  
実測図 S-34  
1: 胡蘿金具  
2・3: 金環  
4・5: 銀製空玉  
6~11: ガラス玉



fig. 217 胡蘿金具出土状況

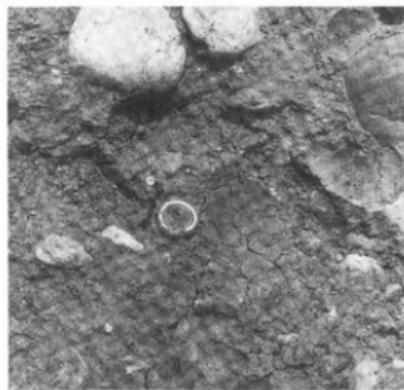


fig. 218 金環出土状況

#### 4.まとめ

今回の発掘調査における成果をまとめながら、今後の課題の一部を示しておこう。

- (1) 弥生時代後期の集落址は、東石ヶ谷遺跡と呼称されてきた尾根上だけでなく、さらに西方へも広がることが確認できた。当該期の集落の実態を把握していく上で重要な位置を占めることになる。
- (2) 古墳時代後期の毘沙門1号墳は6世紀中葉に築造された直径20m～25mの円墳と推定でき、埋葬施設のT字形横穴式石室は神戸市内での初見は言うまでもなく、兵庫県下でも4例目である。全国的にみても約90基が知られるだけで、そのうち約40基が和歌山県北部に集中するような朝鮮半島との交流を窺わせる特徴的な石室である点は興味深い。

一方、副葬品についてみると、須恵器の器台や台付装飾壺が神戸市内では検出例が少ないと加えて、銀製空玉や鉄地金銅張胡蘿金具は初めての出土例である。特に後二者の遺物については各地において当該期の首長墳として把握される古墳からの検出例が多いことから、被葬者を考えていく上で示唆に富む。

また、須恵器の型式からみて、舞子古墳群内最古の古墳という位置づけは現状では動かし難く、舞子丘陵の最高所に古墳が占地する点も被葬者像検討の一助となろう。

今後さらに検討を加えねばならない課題は山積するが、ともかく、今回の毘沙門1号墳の発見は舞子古墳群内の古墳の展開を再考させるだけではなく、造墓集團を考えいく上で重要な意味をもつと言えよう。



fig. 219  
古墳出土須恵器

ながたじんじゅかけいだい  
13. 長田神社境内遺跡

## 1. はじめに

長田神社境内遺跡は、長田神社が大正13年焼失し、同15年に再建のため地均しを行った際発見された遺跡で、当時、弥生土器、石器、瓦等が発掘されて以来周知されていた。

そこへ今回当地に再開発事業の計画が與ったため、遺跡の有無を確認するため、昭和60年10月に試掘調査を実施した。その結果、2丁目部分については遺跡の存在が確認されたが、1丁目部分については調査地点の制約のため目的を達することができず、再度事前に試掘を行うこととなった。

当遺跡は、六甲山地の南に東西に擴がる平野部の西端に近く、東からのびる低く広い丘陵の先端付近、苅藻川の左岸に位置している。



fig. 220  
調査位置図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

- (1) 1丁目地区 対象地に 2m × 30m の南北方向トレンチを 3 本設定し、調査を行った。
- a. I トレンチ 現表土下、約 1.2 ~ 1.4 m で近・現代の耕土層、約 1.8 m で弥生時代後期の遺物包含層に達する。包含層は、厚さ 0.2 ~ 0.4 m を測り土器片を多く含む。トレンチ南端より 7 m の範囲に深さ約 0.4 m の落ち込みがあり、遺物を多く検出した。
- b. II トレンチ 現表土下、約 1.4 m で弥生時代後期及び鎌倉時代の遺物を含む暗青灰色シルト層（厚さ 0.3 m）があり、その直下の明青灰色シルト層にも弥生時代後期の遺物が含まれる。土器には完形乃至完形に近いものも存在する。
- c. III トレンチ III トレンチ南半は盛土下が褐色砂礫層となっており、苅藻川旧河道に当たっていたが北半は黄青灰色シルト層（2丁目地区、遺構ベース土）が残存していた。褐色砂礫層より弥生土器片が出土している。以上の結果から、1丁目地区にも遺跡の存在が認められ、全面的な発掘調査が必要である。



fig. 221 I トレンチ



fig. 222 II トレンチ

(2) 2丁目地区 当地区では現在までに竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟の他、柱穴群、溝、土坑が検出されている。

**SB01** 竪穴住居1 (S B01) は、2回にわたり拡張されている。当初の規模は、東西6m、南北3.6m以上で、西辺部に幅1.6m長さ1.2mの方形張り出し部と、北・西・東方に幅0.6mのベッド状遺構を持つ。1度目の拡張は北へ0.6m、西と東へ0.4m行っているが、この時点ではベッド状遺構を作ったか否かは確認できない。最後の拡張は主に西へ向かって行われ、約0.3m抜けているが、北・東側については、前のものより若干内側に壁を作っている。

**SB02** 竪穴住居2 (S B02) は、東西5m、南北5mの方形を呈するもので、東南隅部に幅1.4m、長さ1.4mの方形張り出し部をもっている。内側に3ヵ所検出された柱穴よりみて、4本の主柱をもつ建物であったと考えられる。

これら竪穴住居は、2棟とも弥生時代終末前後の時期と考えられる。

掘立柱建物S B03、04は、ともに小規模なもので、いずれも弥生時代のものと考えられる。2丁目地区から出土した遺物は、大半が弥生時代後期のものであるが、他に縄文時代晩期、古墳時代後期の土器も出土している。

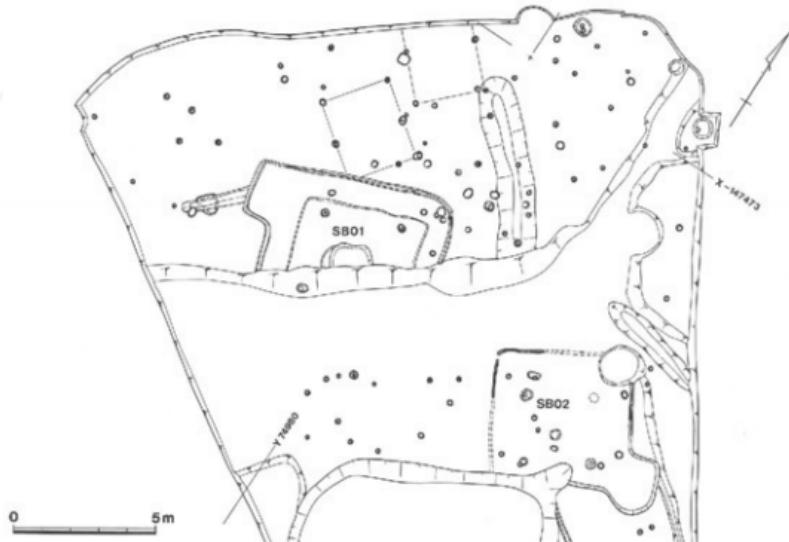


fig. 223 調査地遺構平面図

### 3.まとめ

今回の調査では、弥生時代終末の竪穴住居及び掘立柱建物が検出された。六甲山麓地域では、弥生時代の遺跡は多く知られているが、住居址が検出された遺跡は多くなく、その意義は大きい。

また、明確な遺構は検出されていないが、縄文時代晩期後半（滋賀里VI式、船橋式、長原式）の土器片が多く出土しており、周辺に縄文時代の集落址が存在する可能性が高まった。

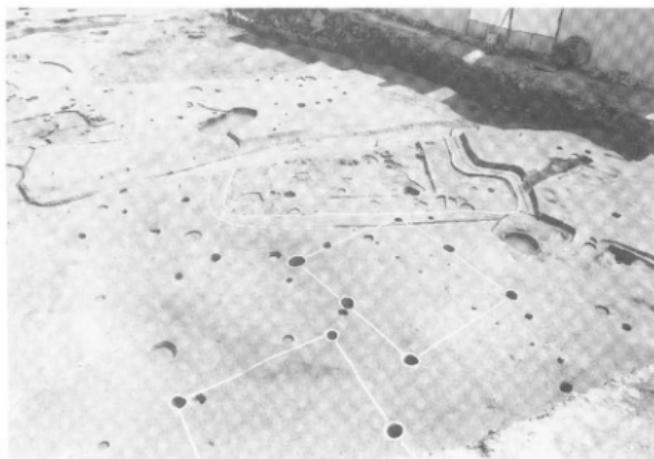


fig. 224 調査地全景



fig. 225  
中央炉内土器出土状況

かくら  
14. 神楽遺跡—第4次—

## 1. はじめに

神楽遺跡は、新湊川（蘿藻川）下流右岸にあり、標高約4mの微高地上に位置している。遺跡は、昭和54年の地下鉄建設工事の際に発見され、以来3度にわたる調査を実施し、多大な成果を収めている。弥生時代から平安時代に至る複合遺跡であることが判明し、第1次調査では平安時代の縁釉陶器や墨書き土器が多数出土しており、実態不明な八部郡衙との関連が考えられている。また、第3次調査では、古式須恵器とともに多数の韓式系土器が出土し、古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物が確認されるなど、古墳時代の集落が存在することが明らかになっている。

今回の調査は、倉庫建設に伴い実施したものであり、調査地は第3次調査地の北西10mの地点である。



fig. 226 調査地位置図 1 : 5,000



fig. 227 調査地東半部(北から)



fig. 228 調査地西半部(北から)

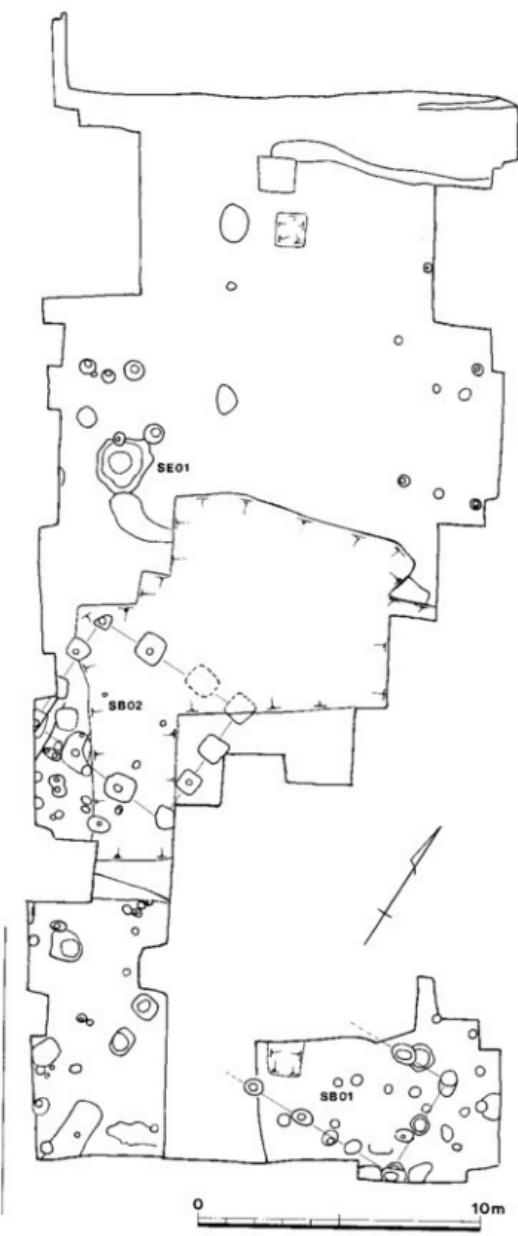


fig. 229  
調査地構造平面図